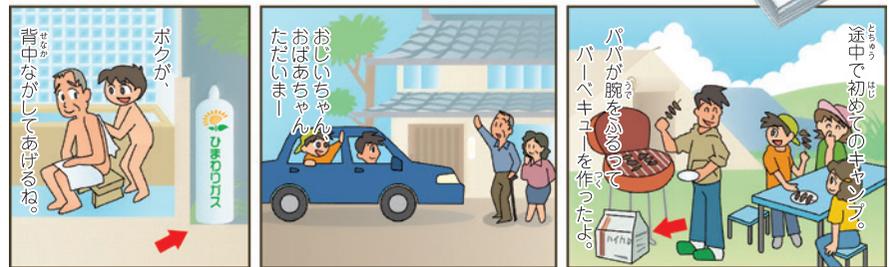
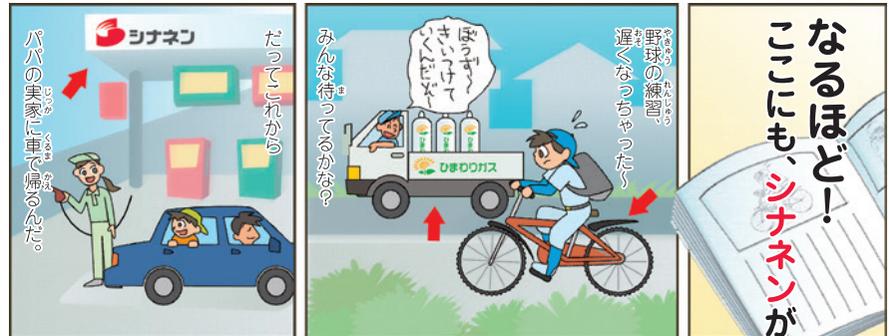


いつもありがとう

第3回作文コンクール入賞作品集 2009

選者 あさのあつこ / 尼子騷兵衛 / 森田正光 / 鈴木弘行 / 下高原拓



こんなに、身近にあったんだ。ボクの街の『快適生活プロバイダー』



いつもありがとう 第三回作文コンクール入賞作品集(2009) もくじ

最優秀賞

「おばあちゃんありがとう」

加藤 愛理

4

シナネン賞

「さかをのぼるおじいちゃん」

渡邊 遥加

6

朝日小学生新聞賞

「ぼつちゃん、生きていてくれてありがとう」

影山 大貴

8

優秀賞

〈低学年の部3編〉

「いつもありがとう」

高野 優

10

「おにいちゃん、いつもありがとう」

中道 真桜

11

「お父さんお母さんすてきな名前ありがとう」

黒杉 涼葉

12

〈高学年の部3編〉

「連絡ノートとおにぎり」

梅本 浩毅

13

「おじいちゃんのおどん」

荒木 瑛雄

14

「ありがとうはおかずの配達」

森谷 みずき

15

入選

〈低学年の部7編〉

「いつもありがとう」

梅川 新太郎

16

「おとうさん、ありがとう」

益田 怜奈

17

「ぼくのおとうさん」

岡野 壮流

18

「ママのおやくそく」

水野 未和

19

「お父さんの写真」

木下 瞬

20

「お父さんへのやくそく」

中野 太輔

21

「サンタクロースになったおじいちゃん」

磯田 真輝

22

〈高学年の部7編〉

「まかせておいて、おじいちゃん」

渡邊 顕子

23

「お父さん、私にチャンスくれてありがとう」

安部 京

24

「わたしがお姉ちゃんになった日」

柴田 真帆

25

「パパとの約束守るからね」

諏訪 ころ

26

「お母さんとドア」

池田 潮音

27

「お姉ちゃんからのプレゼント」

塚本 祥子

28

「ぼくのおじいちゃん」

遠山 智史

29

佳作

〈低学年の部10編〉

「スーパーママ」

圓谷 桂愛

30

「ぼくの大好きなおとうさん」

岸田 優星

31

「さと子ばあば」

山本 里菜

32

「パパへの金メダル」

長妻 愛美

33

「おばあちゃんツアー」

長谷川 翔一

34

「ママへ伝えたいこと」

岡内 健太郎

35

「おじいちゃんからの手紙」

内田 有咲

36

「いろんなことを教えてくれた、大好きな弟」

齋藤 野々花

37

「パパのくつ下」

佐々木 夏奈

38

「じゅんちゃん」

柳原 蓮

39

〈高学年の部10編〉

「おばあちゃんありがとう」

今西 裕季子

40

「初めての夜の留守番」

住井 天音

41

「言葉をこえたやさしさ」

劉 弘毅

42

「二人のお母さんありがとう」

天井 玖瑠海

43

「最高の弟へ」

澤村 駿

44

「家族の絆」

村山 耀子

45

選者あとがき 50

あさのあつこ (作家)

尼子驥兵衛 (漫画家)

森田正光 (気象予報士)

鈴木弘行 (シナネン株式会社代表取締役社長)

下高原拓 (朝日小学生新聞)

主催・・・朝日小学生新聞社

共催・・・シナネングループ

後援・・・文部科学省 朝日新聞社

●応募総数三、三三四作品の中から選ばれました。

「おばあちゃんありがとう」

千葉県千葉市立星久喜小学校二年 加藤 愛理

「二人ともごうちにおいで。」おばあちゃんのおふこえがきこえた。きょうはおぼんがちかいのでみんなでおはかそうじです。お姉ちゃんといそいでこえのするほうへ行くとおばあちゃんがあせをふきながら「これがぼうくうごうのあとだよ。」とおしえてくれました。入口はせまそうだけど中のほうはトンネルのようになっていてうすぐらく、虫のすみかみたいでたのしそうなどころには思えませんでした。おばあちゃんはくうしゅうけいほうになるとうくうずきんをかぶり、妹の手をひいてこのあなの中にかくれたそうです。あそんでいたおだまやぬいかけのふく、ふかしいも、大きな本をぬのせいのリュックにつめてなきながらぼうくうごうまで走ったそうです。わたしはたくさんせんそう中の生かつをしつもんしてみたくまりました。「この木はね、むかしからカブトムシがたくさんとれるんだよ。」といいながらわたしのあせをふいてくれました。そのこかげでたくさんのせんそうのたいけんを話してくれました。おこめがなくてメリケンコというこなでつくったすいとんをたべていたこと、ようふくは、うわぎがセーラーふく下は、もんべというズボンをはいていたりして学校はお休みでまい日家のでつたいをしていたそうです。おばあちゃんは家のようじでお母さんと二人でしんせきの家に行くことになったあるあさ、いとこたちにもあえると思ひよろこんであるいていた時「ウーウーウー」とサイレンがなってとおくからひこうきのエンジンの音がきこえてきたそうです。「はやくちかくのぼうくうごうにひなんしなくちゃ。」とお母さんがつぶやくように言っておばあちゃんの手をひいてやつとおお田山のぼうくうごうについた時「いまはいつてきたらてきにみられてばくだんをおとされてしまうから入るな。」とぼうくうごうの中からどなられたそうです。その話をきいた時わたしはむねがドキドキしました。このままだとおばあちゃんたちがしんでしまうと思ったからです。「おねがいたすけて二人をぼうくうごうの中に入れてあげて。」と、なきたくなりました。おばあちゃんのお母さんは、「おねがいです子どもだけでもぼうくうごうの中に。」とむちゅうでさけんだそうです。わたしはいのちをまもることをまい日どんな時でもかんがえなくてははいないせんそうをたいけんしたおばあちゃんが、今わたしの目の前にいることがとてもうれしくて、うれしくて、いのちはとてもだじだと思ひました。おばあちゃんからのちをバトンタッチされたようで、いままでやさしくほほえんでだきしめてくれるあたたかい手をしたおばあちゃん、せんそうをたいけんしたつよいおばあちゃんこれからもよろしくおねがいます。いきぬいてくれて「どうもありがとう。」心そこからそう思ひました。

さかをのぼるおじいちゃん

宮城県 仙台市立八木山小学校 二年 渡邊 遥加

わたしには、いっしょにすんでいる72さいのおじいちゃんがいます。わたしのいえのまわりは、さかがいっぱいあります。ふゆは雪がつかると、車がすべるくらいのはかさかです。

おじいちゃんは、毎朝わたしたちが学校に行く15分ぐらいまえにいえを出て、いえのまえのさかをのぼります。おじいちゃんは、なんかいか、立ちどまって、

「ハーハー」と、いきをきらしているのをこのまえ見たことがあります。おかあさんに、「どうして、おじいちゃんは、とまっているの。」とわたしがおかあさんに聞くと、おかあさんは、

「おじいちゃんは、はいのびようきをかかえているから、くるしんじやないかな。」とお話してくれました。わたしは、ドキンとして、きゅうにしんばいになりました。

おじいちゃんは、さかの上の歩どうきよう前で、とおる人ぜんいんに、

「おはよう、おはよう。」と、こえをかけます。おじいちゃんは、さかをのぼった時のつらい顔はなく、明るいえがおでみんなに言うのと、みんなも、明るく元気に答えてくれます。おじいちゃんが、歩どうきようの前に立ってっているとわたしは、

「今日も一日がんばるぞー！」とこころの中で思っであんしんして学校に行けます。

雪がふった朝早く、おじいちゃんが、いなくなつた！おかあさんとおばあちゃんが、あわててさがしにいった。おじいちゃんは、歩どうきようの雪かきをしていた。

「しんばいしてそんしちやったあ。」と言ったらおじいちゃんは、

「ハーハー」しながらわらつた。おじいちゃんすごいと思った。

わたしは、おじいちゃんに、

「どうして、きゆうなさかをのぼってまで、あいさつしたり、じぶんのいえでもないのに、雪かきをするの？」と聞いたことがあります。おじいちゃんは、

「みんなのえがおを見れるだけでいいんだ、なんにも言われなくていいんだ。」と言いました。わたしは、そのことばにびっくりしました。いきをきらしながらさかをのぼって、つらい中雪かきしてるのに、

「なんにも言われなくてもいいんだ。」って本とうかな？と思いました。わたしは言わなくていいな。おじいちゃんはそういう、力づよい人なんだ。と思いました。

わたしのしょうらいの目ひょうの人は、おじいちゃんです。

おじいちゃん、いつもやさしくしてくれてありがとう。まもってくれてありがとう。

わたしは、さかをのぼって、あいさつする、おじいちゃんが大好きです。

今年の一月二十一日の二十二時、僕のぼっちゃんの心臓と呼吸が止まった。ぼっちゃんが夜急に苦しくなり、父ちゃんが車で病院へ連れていくと中で止まった。近くの消防しょにかけ込み、きゅう急車に乗せてもらった。病院へ着くと、お医者さんが、ぼっちゃんを生き返らせてくれた。でも僕は、その時ねていたから、そんな大変なことが起こっているなんて、全然知らなかった。

朝になると、母ちゃんが

「おばあさんは、かぜで苦しくなって入院したから、また会いに行こうね。」

と、教えてくれた。ぼっちゃんは、何回も入院してるけど、いつも元気になってたい院していたから、今回もそうだと思っていた。三日たって、母ちゃんが

「おばあさんは、自分で息することも、話すことも、大ちゃんの頭をなでることも出来んよ。でも、お医者さんが、耳は聞こえるって言われたから、会いに行こうね。」

と話してくれた。僕は信じなかった。すぐに会いに行つた。三階の集中治りよう室に、ぼっちゃんはいた。

「ぼっちゃん来たぞー。」

とすぐく明るく入つた。でも、いつもと、あまりにもちがうぼっちゃんのすがたに、

僕は泣きそうになった。がまんした。ぼっちゃんの手をさすつて、

「ぼっちゃん、大だよ。わかる？ぼっちゃんのソーセイジ入りみそ汁が食べたいから、元気になってくれー。ケンカもしたいし、宿題も教えてよ。目を開けてよ。ぼっちゃん。」

と、声をかけた。そしたら、ぼっちゃんの右目から、なみだが流れた。

「ぼっちゃん、わかる？聞こえる？いつも、ありがとうつてなかなか言わんでごめんね。」と言うと、また右目から、なみだが流れた。僕はうれしかったけど、泣きそうで、シヨックで、外へ飛び出した。

母ちゃんが、

「おばあさんは、何十年も朝から夜おそくまで働いてきたから、ねかせてあげようね。」と言つた。僕は、それでいいと思つた。僕はぼっちゃんが生きているだけであれしかつた。それだけで、ありがとうだつた。

僕が大人になる頃には、すごい薬や注射液が出来て、ぼっちゃんがきつと目をさますから、僕は毎年写真をとつておくよ。急に大人になった僕を見て、おどろかないように、いつ目を開けてもいいようにしておくよ。

だからぼっちゃん、安心してねてていいよ。僕は、ぼっちゃんが、起きた時に「ぼっちゃん、生きていてくれて、ありがとう。」

と、必ず言うよ。言わせてね。

優秀賞 低学年の部 いつもありがとう

埼玉県
坂戸市立浅羽野小学校一年

高野 優

ぼくのおとうさんはくるまのぶひんをつくるかいしゃのしゃちょうです。ふだんはとつてもいそがしいです。あさいちばんはやおきして、かいしゃにいきます。ぐあいがわるいときもねつをだしたときもやすまずはたらしにいきます。また、ぼくのからでのれんしゅうあいてをして、じてんしゃのドライブあいてになってくれます。毎年なつになるといっぱいこん虫をつかまえてくれます。そしてむしのことをおしえてもらいました。今年の5月ごろ、パパはがんめんまひのびようきになりました。ごはんをたべるときはあじがわからない、みずをのむときもこぼれます。みぎがわのかおはほとんどんさがつていく。パパがかいしゃへいったときに、ぼくはママからきいた。パパのびようきはストレスがたまったことがげんいんです。

優秀賞 低学年の部 おにいちゃん、いつもありがとう

奈良県
橿原市立真菅小学校一年

中道 真桜

「いつてきまーす。」
おにいちゃんがげん気よく、いえを出ていきました。三ばく四日のじゅくのがつしゅくです。こんなにおにいちゃんがいなのは、はじめてです。
「さあ、なにをしてあそぼうかな。」
わたしはわくわくしてきました。

だいすきなぬいぐるみをひとりじめです。ゲームもじゅうにできます。テレビだつてすきなまんがをすきなだけみられます。「パーカ。」なんていわれることもありません。ボールなげきょうそうでまけてなくともありません。
ぬいぐるみをぜんぶならべてままことをしました。ゲームもいっぱいしました。テレビもみました。なんかいもボールなげをしました。
でも、あそんでいるとすぐにおにいちゃんのかおがうかんできます。
「おにいちゃん、いまなにをしているのかな。べんきょう、がんばつてるのかな。」あそんでいてもぜんぜんたのしくありま

ぼくはあんまりストレスということがわからないので、ママにきいてみたら、今年はアメリカのけいきがわるいの、日本の車がうれなくなつて、パパのかいしゃもだいがひまになりました。そしてかいしゃのことをかんがえすぎて、ふあんでねれなくなつて、心も体もつかれきつてこのびようきになりました。そのひ、ちようどぼくの7才のたんじょうびです。パパといっしょにきねんしゃしんをとりました。いまはパパのびようきもすつかりなおつたし、かいしゃももどろりになりました。ぼくはときどきアルバムをみると、このしゃしんはぼくのいちばんのおきにいり、たからものになりました。これからどんなことがあつてもくじけないで、がんばります。そしてぼくのじまんのおとうさんありがとう。

せん。おにいちゃんがぐらげのぬいぐるみでわたしがイルカのぬいぐるみ。いつものようにおはなししたいな。どうやったら、モンスターをたおせるのだろう。おしえてほしいな。テレビをみていっしょにゲラゲラわらいたいな。おにいちゃんとやったらボールももつとはやくなげられるのに。
「そうか。いつもおにいちゃんがいっしょにあそんでくれるから、たのしいんだ。」

きゅうにさみしくなつてきました。
「はやくかえつてきてよ、おにいちゃん。」おにいちゃんがいつしよだとすごくたのしいです。おにいちゃんがいっしょだとすこいことができるんです。わたしもおにいちゃんみたいにつよくてかしこいひとになります。
おにいちゃん、いつもあそんでくれてありがとう。いろいろなことをおしえてくれて、ありがとう。かえつてきたら、いっしょにあそんでね。でも、ちよつとだけやさしくしてね。おねがいね。

私の名前は涼しい葉っぱと書いてすずはと読みます。私はこの名前をすごく気に入っています。

「お母さん、どうして涼葉という名前にしたの？」と聞いてみると、

「大きく、育つてみんなに木かけを作つてあげられるようなやさしくそこにみんながあつまつてくれるような子になつてほしいと思つてつけたよ。」

と言っていました。

私の姉弟にはみんなイメージソングがあります。私は「この木なんの木」です。

このことを先生に話したら、

「イメージソングがあるなんてうらやましい。」と言ってくれました。それを言われてちよつとてくれました。

でもうれしかったです。

弟は海風（みなぎ）と言います。

「海風の名前の由来は？」

と聞いてみると、

優秀賞 高学年の部 連絡ノートと、おにぎり二こ

福岡県
北九州市立青山小学校 四年

梅本 浩毅

「ただいまっつ。」

学校から帰つて、だれもない静かな部屋に向かつて、ほくは大きな声でそう言う。そして急いでリビングのテーブルの上に置いてある、お母さんからの「連絡ノート」を読む。

そのノートには日付けとおかえりの文字とカエルの絵が書いてあつて、学校から帰つたばかりが困らないようにいろんなことがお母さんの字で書いてある。カエルの絵は無事に帰つての意味らしい。いつも同じことの続きに、その日のほくの予定などが、簡単な絵といっしょに書いてある。お母さんが「毎日、同じことやけ書かんでも分かるやろ。」と、ほくに言うけど、ほくはそのノートに書いてあるお母さんの字の「おかえり」とカエルの絵が、本当にお母さんが「おかえり」と言つて、出むかえてくれている気がするのと、忘れていくことの確認のため、

「わかつとおけど、書いてっつて。」

と、毎日お願いしてしまふ。

お母さんはほくの通っている小学校のとなりにある保育園で、赤ちゃんクラスの保育士の先生として働いている。一度だけ、ほくが体育館のそばを走っている時、

「ひろきーっ。」

と大きな声が聞こえた。びつくりしてほくがふり返ると、お母さんが保育園の二階のテラスから手をふつていたことが

「どんなあらなみ(つらいこと)がおこつても、自分の力で風のように太陽にあたつて、キラキラするような子になつてほしいと思つて、つけたそうです。海風のイメージソングは「いい日旅立ち 西へ」だそうです。あともう一人弟がいて流石(さすが)と言います。「さすが!!と言われるような人ではなくて、上流から石が転がって行くと、かどがあつた石もだんだんまるくなるように、いろいろなけいけんをして、人間が丸くなるように。」という思いでつけたそうです。イメージソングは「川の流れのように」です。

このようにいろいろと考えてつけてくれた名前なので、名前を書く時は、いつもいいねいに書いています。

お父さん、お母さんたちは生まれた子どもに一番はじめに「名前」というすてきなプレゼントしてくれました。これは一生つかう名前だから一生けんめい考えてくれたそうです。

私も子どもが生まれたら、一生けんめいに名前を考えてつけてあげます。そして気に入つてくれたらうれいいです。

お父さん、お母さんすてきな名前ありがとう。

あつた。ほくはうれしくて、お母さんに負けないように手をふり返した。

学校のろう下の窓から、お母さんがお仕事している保育園が見える。お母さんの姿は見えないけど、それだけで安心する時がある。ほくは週には二回、スイミングスクールに通っている。級が上がるにつれ、泳ぐきよりも長くなつて、おなかがペコペコになつてふらふらすることが多くなつた。お母さんにそう話すと「おにぎり、作つてこおか。お菓子やパンよりずっと、はら持ちがいいよ。」と言つた。ほくはごはんより、パンの方が断然に好きだったので、ちよつと考えたけど連絡ノートのように、またまた「じゃあ、お願い。」

そう、たのんだ。

お母さんは、ほくの大好きな鮭をほくにごまのたつぷり入つたおにぎりと、わかめとごまののりまきおにぎりを二こずつ作つてくれている。ごはんがあまり好きじゃなかつたほくなのに、おなかへつているからなのか、

お母さんが作ってくれるおにぎりがおいしいからなのか、わからないけれどわりと大きな二このおにぎりをペロリと食べてしまふ。お母さん、おこるとすごくこわいけど、ほくががんばつた時は、たくさんほめてくれてありがとう。ほくが大きくなつたら、今度はほくが作ったおにぎりをいっしょに食べながら、連絡ノートを読んで思い出を話そうね。

ぼくの家では、料理の得意なおじいちゃんが、ご飯の用意をしてくれる。何でも簡単に作ってしまうおじいちゃんのおどん料理は、「うどん」だ。にぼしとこんぶを使った、おじいちゃんのお伝のだしらしい。おじいちゃんのおどんはおいしいけれど、ぼくは、うどんよりスパゲッティやラーメンの方が好きなので少ししかうどんを食べないことが多い。それに、おじいちゃんは気が短く、「早く食べんか」と、急がせてくるので、静かに食べたいぼくは、よく「じいちゃんうるさいだまっ」といて」と、強い言葉をじいちゃんに言つて、さつさと食べたものを食べたなら、台所から部屋へ行つてしまふことが多い。

ある日、ぼくは朝から気分が悪いまま学校へ行き、午前の学習中に高熱が出て早退してしまつた。その時、家からじいちゃんが学校へむかえに来てくれた。そしてすぐに病院へ連れて行つてくれた。いつもならばぼくがしつこいと思うくらい何でもしゃべつてくるじいちゃんが、車の中では何もぼくに話しかけず、だまつてぼくの面どうをみてくれた。

「じいちゃん、何でだまつとんが。」

と、ぼくが心配になつて聞くと、

「だやいがやから、ちんとしとろ。」

と、一言だけそう言つて車の運転を続けた。

家に帰るとじいちゃんは、すぐに、ぼくの昼ご飯の用意をしてくれた。

「かせひいたら、消化のいいもの食べてねるのが一番。」

と言って、じいちゃんはおどんを作つてくれた。その時ぼくは、じいちゃんがどれだけぼくのことを気にかけているのかがよく分かつた。そういえば、放課後、友達と遊べなかつた時じいちゃんをよくぼくとサッカーをして遊んでくれたり、自転車の練習につきあつてくれたりしている。買った物に行くところ、そりおかしを買つてくれたりもする。いつだってぼくのことを思つてくれるのに、ぼくは、じいちゃんに冷たくしてばかりいる。それでもじいちゃんは、変わらずぼくのことを考えてくれている。ぼくは、じいちゃんに悪いことをしていたなあという気持ちがかみ上げ、涙が止まらなかつた。

「かせひいとるから、ちよつとす味にしたけど味うすいか。」

と、じいちゃんはぼくにたずねた。たしかに少しうす味だと思つたけど、ぼくの涙とだしがまぎつたうどんのしるは、ちよつとよい味がした。

「じいちゃん、おかわりしていい。」

と、ぼくが聞くと、

「それだけ食よくあつたらすぐ治るちゃ。」

と、うれしそうに言つてくれた。

少し口うるさいおじいちゃんだけど、これからは「ありがとう」の気持ちをかめて、大好きなじいちゃんのおしゃべりに、少しだけ付き合つてみようかなと思つた。

優秀賞 高学年の部 ありがとうはおかずの配達

群馬県
明和町立明和西小学校 六年

森谷 みずき

私の家には絵本の表面が見れる手作りの大きな本棚があります。

まだ小さかつた頃、お風呂から上がった私とお兄ちゃんは、毎晩寝る前に、

「今日はどの絵本にしようかな？」

と絵本を選び、母に読んでもらつていました。この本棚は、おじいちゃんが作つてくれたそうです。

私の部屋からおじいちゃんの家と、畑と、トマトのビニールハウスが見えます。昔は一面のぶどう畑だつたそうです。おじいちゃんの家は農家です。私が生まれた頃はぶどうを作つていたそうですが年をとつてしまつた今はお米と私たちが食べる野菜を作っています。

その代わりに私達が生まれてからは、喜ぶだろうと実のなる木をたくさん植えてくれました。春はいちごから始まり、メロン、もも、みかん、りんご、などなど……。

今は食べ頃のかきを毎日、冷やして食べています。毎年甘かつたり、味がなかつたり、ぼそぼそすることもありますが、今年は百点満点！みずみずしいこのすいかが大好きです。

夜、おじいちゃん家に行くことがあります。

母に

「おじいちゃんにおかず、持つていつてあげて。」

と言われると、喜んで「はい」と行きます。

お兄ちゃんとゲームの話をしながら暗くなつた道をライトでたらし、とことこ、ばたばた、と二人で並んで歩きます。ガラガラと玄関を開けて、

「おじいちゃん、おかずもつてきたよ。」

とさげふと、

「はい。ありがとね。」

お風呂上りで横になり半分夢の世界に行きながら野球の巨人の試合を見ていたおじいちゃんは、にこにこ笑顔で答えてくれます。そしていつものようにお菓子や果物をくれます。家に帰り母にもらつた物を見せると、「またもらつたの、よかつたね。」

と母はちよつとうれしそうに言います。

後何年今のような生活を続けていけるでしょうか。

私たちが大人になって、おじいちゃんが今よりもつと年を取つて、田も畑もいつまで続けられるでしょうか。

そんなことを考えていたら、夕焼けの中に汗びっしょりの丸くなったおじいちゃんの背中が、一回り小さくなつた気がしました。

「お母さん、今晚のおかず何、私おじいちゃん家を持つていくから。」

大声で言いました。

しょうがくせいになって、はじめてのなつやすみは、きょねんとちがいます。どろがちがうのかというところ、いつもいっしょに「え」をかいたり、しんぶんをよんだり、ゴミだしをしたり、ジョークをわらわらつてくれたり、こうさくをみて「しんちゃん、じょうずだね。」と、ほめてくれた大すきなおじいちゃんがいらないのです。ほくが「ねんせいになるすこしまえに、おはかにはいりました。「天国というばしょで、おじいちゃんはいつもみているんだよ。」と、おかあさんはいいます。シーンとせずか、でんきがつかなくなつたおじいちゃんのへやが、「さみしいよ。」と、いつているみたいで、おかあさんに「おじいちゃんのへやを、ほくのへやにしてもいい？」と、ききました。すると、おかあさんは、「そうだね、おじいちゃんもきつと、しんちゃんにつかってもらえたら、よろこぶわね。」と、さんせいしてくれましたので、さつそく、へやのドアに、はりがみをしました。『しんたろうとおじいちゃんのへや』よこにランドセルをせおつたほくと、ゆうれいのがたをしたおじいちゃん、ならんでピースをしている「え」もかきました。つくえをはこんでもらい、カレンダーをはつたり、本をならべたり、たいせつなロボットたちをならべてかんせい。そこへ、おばあちゃんとおかあさんがきて、「あらーすてきなへやに大へんしんしたね。しんちゃん、ありがとう。」とわらいがお

でなっていました。ほくも、「おじいちゃんといっしょにいるみたいで、うれいよ。ありがとう。」と、いいました。ほくがへやにいると、いもうとのあおいちゃんがあそびにきているので、おかあさんが「あおいちゃん、つくえも、いれいい？」と、ききました。ほくは「いいよ。」と、こたえました。ときどき、あおいちゃんに「ひらがな」をおしえてあげると「わあーおにいちゃん、ありがとう。」といつてくれてうれいです。そういえば、おじいちゃんはいつもかぞくに「ありがとうね、ありがとうね。」と、えがおでいつていたなあとおもいだしたら、かなしいきもちになつてしまいました。おじいちゃんは70さいで天国へいきました。ほくは170さいまでながいきしたいです（おじいちゃんの70さいとほくの100さいをたす）。そして、おじいちゃんがいっしょにいた『ありがとう』という、みんながしあわせになれることばを、いつもやさしくしてくる、かぞくのみんなど、いっしょにつかって、もつともつと、しあわせになりたいです。おじいちゃん、いままでほんとにありがとう。「天国」からいつもみていてね。そして、おとうさん、おかあさん、あおいちゃん、おばあちゃん、ほくを大すきだよつて、まいにちだきしめてくれて、たくさん元気をくれて、ありがとう。これからもよろしくね!!

入選 低学年の部 おとうさん、ありがとう

鹿児島県
鹿児島市立大明丘小学校一年

益田 怜奈

わたしのおとうさんは、ばんやさんで、ばんをつくつています。わたしがまだねている、よなかの三じにおきてしごとについています。

わたしが、そのおみせのなまえをいつたら、せんせいたちが、「えっ、そのばんは、とつてもおしいってゆうめいなんだよ。いいなあ、たべたいなあ。」

とびつくりして、うらやましそうにいつていました。それをきいて、わたしもびつくりしました。おとうさんつてすごいなあとうれしくなりました。

このまえ、おとうさんといっしょにめろんばんをつくりました。おうちのきかいできじをこねるときに、おとうととそのなかをみていたら、おもしろくなつて

「きじがあはれてるう。」
とわらつてしまいました。

てのひらできじをまるめるときおとうさんが
「てにくつつくよ。」

といつていたので、きょうりきこをつけて、おとうとといっしょ

にこねこねしていききました。

はじめはうまくいかなつたけど、いっしょうけんめいやつていたらじょうずにできるようになりました。それから、おとうさんがめろんばんのかたちにしてオープンでやいてくれました。しばらくすると、とつてもいいにおいがしてきました。やきたてめろんばんはとつてもおいしかったです。こんなにおいしいばんをつくるおとうさんはかっこいんです。

でもときどきとつてもつかれているときが、あります。そのときはわたしがマッサージをしてあげます。おとうさんは、

「きもちいいー、ありがとう。」ときもちよさそうにいいます。いっばいばんをつくつてたいへんなかなあとおもいます。

おとうさんもおしごとをいっしょうけんめいがんばっているの、わたしもおべんきょうやおてつだいをがんばります。おとうさん、いつもかぞくみんなのためにはたらいてくれてありがとう。

ぼくのおとうさんは、めったにおこらない人です。でも、ある日おとうさんはすごくおこりました。それは、ぼくがおかあさんに、

「いちいちうるさい。」

と行ってしまったからです。おとうさんは、それをきいていてぼくをよびました。

「たける、おかあさんにうるさいってどういうことだ。

おかあさんにあやまりなさい。」

ぼくは、いつものおとうさんとちがって、ものすごく

おこっているの、きょうはおとうさんとおふるにはいるのはこわくていやだなとおもいました。

「たける、さっきはおこってわるかったな。おとうさんの

おかあさんは、おとうさんがたけるよりもっと小さいときに、びょうきでしんでしまったんだよ。だから、おとう

さんにはわるいことをしてもしかつてくれるおかあさんがいなかったんだ。しかつてくれるおかあさんがいるたけるは、とてもしあわせなんだよ。わかるか。」

「うん。」

ぼくは、なみだがでてきました。おとうさんはいつものやさしいおとうさんでした。ぼくは、「うるさい」なんていつてしまった、ほんとうにわるかったとおもいました。

「おかあさん、さっきはごめんなさい。」

おかあさんはうれしそうに、

「いいよ。」

といました。

ぼく、おとうさんもおかあさんもだいすきだよ。

いつも、ありがとう。

入選 低学年の部

ママとのおやくそく

福岡県
飯塚市立平恒小学校二年

水野 未和

わたしのベッドのよこに、ママが「みわちゃんの七かじょう。」と、紙に書いてはつてあります。

一、おねえちゃんのじゃまをしない。

二、よばれたら、おへんじをする。

三、「いやだ、いやだ。」わがままをいわない。

四、はみがきをちゃんとする。

五、いわれたことは、すぐにする。

六、ジュースばかり、のまない。

七、早くねる。

おやくそくをまもれなかったときは、おもちゃも、ようふくもぜんぶすてます。

ママは、ほんとうに、おもちゃをゴミぶくろの中にみんな入れて、お外に出しました。

わたしは、おこつてとなりのおばあちゃんのいえに、いえでをしました。でも、つぎの日、うちにかえったら、ママは

ニコニコして「いえでむすめ。」とおこられました。

でも、いまは「ばん目のやくそくは、ときたままもっていません。」

ママのぶつだんのそうじや、ごはんや水を、ちゃんとあげて、なむあみだぶつママ、いつてきます。おはよう。ただいま。おやすみ。ママのことを、思っています。わたしの七かじょう、ママありがとう。

もつとママのいうことが、おべんきょうに、なりました。

ママ、ごめんね。ママ大好きだよ。

入選 低学年の部 お父さんの写真

京都府
ノートルダム学院小学校 三年

木下 瞬

ほくのお父さんは、ほくが生まれた時、ほくの顔が時間とともに変化する様子を記録したいと思ったそうです。

だから、お父さんは毎日ほくの写真を撮ります。ほくが生まれた日から九年間、欠かすことなく同じアングルでデジタル写真を撮り続けています。

何故同じアングルかと言うと、それが顔の変化を最も捉えやすいからだそうです。お父さんに、

「瞬、仰向けー。」

と言われると、ほくは仰向けになります。そして真正面から写真を撮られます。生まれた時には仰向けでしかいられなかったのですが、いまだに同じ姿勢で撮られているわけです。ほくが覚えた言葉の中で、「仰向け」と言うのは、かなり最初の方にランキングされると思います。

お父さんはパソコンで画像処理して、ほくの顔が日々変化していく様子を見せてくれます。毎日の写真をバラバラ漫画に見せてくれます。最初は赤ちゃんだったほくの顔は、いつの間にか赤ちゃんではなくなります。明確なター

ニングポイントはありませんが、どこからかほくはもう赤ちゃんではなくなっています。

お父さんは、顔のパーツを自動認識できるソフトを作りたいと言っています。それなら誰でも画像処理が可能だからです。

お父さんは、ほくが大人になったら子供に写真を撮ってもらえよと言います。どうやらほくは、死ぬまで写真を撮られる宿命を背負っているようです。

でも、生涯にわたって顔の変化を記録できたら、それはそれで貴重な資料になると思います。こんな暇こと誰もしないだけに、もしかしたら新しい発見に繋がるかもしれません。

そう思いながら、ほくは毎日、半分はお父さんのために、残りの半分はほくの為に撮影に協力しています。本当はほくにも「ありがとう」って言って欲しいところだけれど、どんなに仕事で疲れていても、ほくの記録を作る為に毎日写真を撮り続けるお父さんに、ほくは感謝しています。でも口に出して言うのは照れるから、この場を借りて言ってみます。「お父さん、ありがとう。」

入選 低学年の部

お父さんへのやくそく

愛媛県
今治市立伯方小学校 三年

中野 太輔

お父さん、いま天国でなにをしていますか。いつも、ほくとお姉ちゃんとお母さんをみまもってくれていますか。ほくはまだ、お父さんが生きていような気がします。

一年生の時、お父さんといっしょにふとんに入るといつもお父さんはむずかしい計算もんだいを出してきたね。二けたのたし算のもんだいをだされて考えて答えると、

「おっ、さすがわしのこじゃ」とほめてくれたね。ほくはそれがうれしくて、

「もつと、むずかしいのをだして」

と言うと、こんどは、三けたのたし算をだされてものすごく考えて答えると

「お、それもできたかー！」

とまた、ほめてくれたね。ほくは、お父さんにほめられることがとってもうれしかったんだよ。

お父さん、休みの時、よくやきゅうをやってくれたね。お父さんは、「へたくそ」というのが口ぐせで、ほくははらがたつて、「ほくはへたくそじゃないもん」と言っていたね。ほくは、くやしくて、こんどは、ボールをよくみてうとうとおもったけど、お父さんのボールは

はやくて、うてなかった。今は、お父さんに、言われたようにボールをよく見てうてるようになって、とおくまでとばせるようになったよ。

きのう、はかたの花火大会だったよ。きよねんの花火はお父さんといっしょにみたね。ことしもお父さんといっしょにみたくて、ことしは家でみたよ。はじめて家からみた花火もキレイだったね。ほくは、お父さんがよく見えるようにお父さんのしゃしんをもつてたよ。お父さん、キレイな花火がよくみることができたかな。とってもキレイだったね。らい年も、いっしょに花火をみようね。

今、ほくは、もつともつとおとうさんとはなしをしたかった、お父さんのよるこぶことがしたかった。お母さんがいってたけど、お父さんは、ほくと姉ちゃんのことをしんばいしてくれてたんだね。いまもしんばいしてくれているかな。友だちとケンカをせずなんでもいっしょうけんめいがんばるよ。これは、お父さんとほくはやくそくだよ。また、お父さんにほめられるようにがんばるよ。ずっとずっと天国からみまもっていてね。

ほつぺはガチガチで、はなは、こおりみたいで、鼻水が出ているのも分らない。さむさに涙がこぼれてくる。

お正月のおあつつい、重い新聞をほくち五人のこともとお母さんの車にのせて、配るのを、手伝う、一年の始まりの行事でした。おじいちゃんは、三十八年間、七十五才まで、自転車で、新聞配達をガンバっていました。暑い夏の日には、カブト虫をたくさん取ってきてくれました。おじいちゃんの家にとまるのが大好きでした。おじいちゃんの手は大きくって、グローブみたいな手でした。そんな、おじいちゃんが、こしがいたいと、ねこんでしまいました。病気はガンでした。大きなグローブみたいな手は、とまりに行くたびに小さくなっていました。春の暖かい日に車イスを外を少しだけサンボしに行った時に、道にへびがいました。ほくはドキッとしたけれどおじいちゃんは、「真輝、へびをいじめたりするな。こわくないからな。ジャンプをしてみる。」と言われて、ジャンプをしました。へびはスルスルと畑へにげて行きました。「二年生になったら、ひとり帰れるか。」と、やさしい顔して笑って言いました。そんなおじいちゃんも、病院に入院する日、「こくらくに行ったら、ランドセル買ってやれないな。」って、きゆうきゆう車が来た時、ほくが見た事のない、かなしい顔で行きました。

病院におみまいに行くと、おじいちゃんは、うれしそうに、

入選 高学年の部

まかせておいて、おじいちゃん

福岡県

筑紫野市立天拝小学校四年

渡邊 顕子

「あきちゃん、びつくりしないでね。」今年の十二月の寒い日、学校から帰るとお母さんが悲しそうな顔で言た。

「おじいちゃんが入院したよ。」

「えっ。」

私はびつくりして心臓が飛び出しそうだった。おじいちゃんは、脳の病気で突然倒れたそう。おとといは、あんなに元気で一緒にいつもの公園まで散歩したのに。

かけつけた病院のベッドにねていたおじいちゃんは、別の人みたいに小さかった。大好きなおじいちゃんが遠くに行ってしまったようで、怖くて、プルプルふるえてしまった。

今、おじいちゃんは退院して、大好きな散歩にも行けるくらい元気になった。でも、頭の中のほんの少しの部分が、故障したままなのだ。そのせいで、数字の計算や、長い問物を覚えることができなくなってしまった。

「もう生きていても仕方ないなあ、なんて言う時もあるのよ。どうやって元気づけてあげたらいいのかしら。」おばあちゃんとお母さんが心配そうにため息をつきながら、顔を見合わせている。

「おじいちゃん、元気でいてね。おじいちゃんがいなくなったら、私、困っちゃうよ。」

今日も一緒に散歩しながら、私はさびしそうなおじい

「これが外まご三人、こつちが内まご二人、後一人にランドセル買ってやらないと、死んじやあいられないんだよ。」いつもとかわらないやさしい顔で、病室の人を笑わせて、お母さんがニコリ笑って、ほく達が帰るとき、かならず、「お母さんがとうな。」「明日は、おじいちゃんをむかえにきてくれ。」「おじいちゃんはサンタクロースになるんべかナー。」と大声で笑っていました。そんな、おじいちゃんは、ほくが年中の夏休みになくなってしまいました。お母さんが泣いていました。家に来る人みんな、泣いていました。

病院から帰って来たおじいちゃんは、いつもとかわらない、やさしい顔でねていました。ほくが一年生になった時、おばあちゃんから「おじいちゃんからのプレゼントだよ。」と黒い大きなランドセルをもらった。ランドセルありがとう。まぶしいオレンジ色の初日の出を見せてくれてありがとう。学校の帰り道にね、へびがいたよ。ジャンプをおしえてくれてありがとう。お姉ちゃんには紙のお金、お兄ちゃんは五百円二まい、ほくには百円五十まいの意味、算数で数を先生におそわったよ。みんな同じおこ使いだっただね。生まれた日の新聞を取っておいでくれればありがとう。サンタになつてくれればありがとう。クリスマス。へやを温つたためにおくからね。ほくは、来年は4年生になるんだ。

ちゃんの背中に向かって、心の中でそつと呼びかけている。四人兄弟の三番目に生まれた私にとって、いつもやさしくにぎってくれるおじいちゃんの手は、特別なのだ。お父さんやお母さんのヒザがお姉ちゃん達でいっぱい時も、おじいちゃんのあったかいヒザにフワッとすわったら、それだけで安心できる。このヒザで絵本をいっぱい読んでもらったな。お話に感動して、さい初に泣くのはいつもおじいちゃんだ。たっけ。たくさんドライブにも連れていってくれた。おじいちゃんとお海で見た、オレンジ色の夕やけは、今でも目の中にうかんでくる。一人ぼっちでさびしい時には、いつも私をそつとだきしめてくれたおじいちゃん。

「おじいちゃん、ありがとう。いつもそばにいてくれて。」

今度は、私がおじいちゃんの手をにぎってあげる番だ、これから漢字をいっぱい覚えて、たくさん本を読んであげるよ。新聞もストラ読めるようになりたいし、算数の計算だつていつ生けん命がんばるよ。

「あきちゃんにまかせておいて、おじいちゃん。これからもずつと一緒だよ。」

私は、父に感謝したいと思う。それは二〇〇三年から二〇〇六年、私が年長から小二までのお話である。ある日突然、父が私に真剣な顔で言った。「仕事の関係で中国の上海市に転勤する事になった。」

私はその時、びっくりしたが、やがてきつぱりと、「そんなの絶対にいやだ。お友達と先生とお別れするの、絶対にいやだもん！」と泣きそうな顔で言って、部屋に戻ったが、新しい事にチャレンジしてみてもいいかなあと思った。今頃文句を言っても間に合わないと思った。

次の日には父に、「私も行きます。」と言った。

そして二〇〇三年―。ついに中国の上海に来たのだ。そして三週間位たつたら、中国人の幼稚園に入園した。中国語は、言もわからずに…。もちろん日本人一人だった。最初の日、心ぞうがばく発する位ドキドキした。

私は始め、クラスのみんなに色々質問されて、わからなくて泣いていた。けれども三ヶ月弱、ついに私はかんたんな標準的な中国語が話せる様になった。うれしくてたまらなかつた。まるで人生で最高の日の様に。どうやってお友達が出来たか？それは私が、積極的にどんどんと話して

いったからだ。

どうして父と母は私を中国人の幼稚園に行かせたのかというと、私は小さい頃から社交的な性格で、中国で生活する機会を利用して、世界で英語の次に多く話されている中国語を学ばせようと思ったからだ。

私は幼稚園のみんなの発音を聞いていたので、いつの間にか中国語の正しい発音で話せる様になっていた。いつも中国人のいるお店に行つて、私が中国語で話したら、店員さんが、

「親のどちらか中国人ですか。」と聞いてくる。どうしてかというと、私の発音はネイティブの中国語であるからだ。まるで中国人になれた気分だ。

今、私はここ、日本にいても私が中国語が話せるという貴重な財産を守り続けるために今でも父は、中国語の学校に通わせてくれている。毎年夏には、上海に留学もしている。私は二〇十五年のポリーイスカウト世界ジャンボリーで、中国語の通訳が出来るようになりたい。

私は、やればできる！とあらためて思う。こんな機会を作ってくれた父に、感謝している。将来中国と日本のかけ橋になりたい。

「お父さん、ありがとう！」

入選 高学年の部

私がお姉ちゃんになった日

千葉県
八千代市立萱田小学校 五年

柴田 真帆

二〇〇五年二月八日、この日は妹の誕生日予定日でした。ずっと妹や弟がほしかった私は、その日がまちとおしくてしかたがありませんでした。お母さんの病院通いで、少しさみしくなった時もありましたが、生まれてくる赤ちゃんのためなら、どんなことでもがまんすることができました。

一月二日の夜、お母さんの体調が急変、予定日までまだ一カ月もあるのに、そのころ幼稚園生だった私は、早く赤ちゃんに会うことができると、うれしく思いました。

でも、病院に着くと、先生や看護師さん達は、とても慌ただしく、緊張感のある様子に何だか不安になりました。先生の「最悪の場合、母体を優先します。」の言葉。母体を優先？意味がわかりませんが、最悪は理解できました。やつと私がお姉ちゃんになれるというのに、とても心配でした。

心ぞうがはりさけそうになりながら部屋で待っていると、コンコン、ドアがノックされました。私は直感で赤ちゃんだと思い、飛んでいきました。そこにいたのは、透明の箱に入った小さな妹でした。指もマツチぼうのように細く、想像していた赤ちゃんと、全くちがいました。こんな小さな体の中に、私と同じ命が宿つていることを、不思議に思いました。その時少しか、足にふれることができきました。とても温かく、世界で一番幸せなものにふれた気が

がしました。心ぞうがビクツ、小さく動く妹は、とてもかわいくて、心配も一気に飛んでいきました。

現在、医師不足や病院の設備、受け入れ拒否などの問題から、生まれて来るはずの赤ちゃん、時にはお母さんまで命をおとす、そんなニュースをよく耳にします。その度にとっても悲しい気持ちになり、また今ある命の大切さを強く感じます。

後から妹に、少し障害があることがわかりましたが、あんなに小さく生まれた妹は、食べる事が大好きで、私が抱いているのも大変なくらい大きく成長し、今は、私が姉になったころと同じ、元気な幼稚園生です。たくさんの先生、看護師さんのおかげで助けられた命だと思います。先生、看護師さん本当にどうもありがとうございます。

妹の帆乃佳へ、いつもけんかしてばかりだけど、それで友達や相手の気持ちをよく考えることの大切さを学んだよ。障害を持った帆乃佳だけど、いつも笑顔でがんばっている姿を見て、自分の甘えや弱さを知り、がんばらなくてはと思うよ。手も足も何も不自由でない私は、今まであたり前に思っていたことが、とても幸せなことだと知ることができたよ。そうして、私は帆乃佳から、たくさんのことを教えてもらっているんだよ。いつもありがとう。そして、私の妹に生まれて来てくれて本当にありがとう。

「パパの事は絶対に忘れないよ。私の心の中には、いつもパパがいるからね。」

私の父は、三年前から肝臓と腎臓を悪くして病気が開ってしまいました。入退院をくり返したり、胸やお腹に水がたまらないように毎日注射に行ったり、一日に飲む水の量も決められ、好きな食べ物、飲み物もガマンして頑張っていました。私はいつも「パパかわいそう」と思っていました。父は大丈夫だと。それどころか、水泳の選手クラスの私が、ベストタイムが出ない。大会でいい結果が出ない時は「こころ、ガマン。ガマン。頑張っていれば、きっといい事があるよ。続ける事が強いんだ。」とはげましてくれました。本当は父の方がつらく大変なのに。だから私は母が病院に泊まりの日も、朝練のある日は五時に起き、ご飯を食べ、おにぎりを作り練習に出かけた。好きでやっている水泳だし、父は私の水泳を応援してくれていたから、頑張った。

二月一日午後七時ごろ、病院にいる母から「パパがぶないからお姉ちゃんと病院に来なさい。早くね。パパが待つてるからね。」と電話があった。とてもこわかった。パパが死んじゃう〴〵と思つたら、こわくてたまらなくなつた。病院に着いたら父は、少し苦しうに息をしていた。でもしっかりと生きていた。しばらくして、父の息が静かになつてきた。「パパ頑張つて。こころだよ。わかる？みんなそばにいるからね。パパ。パパ。」

と大きな声で声をかけた。父は、二三日前から意識がなく声をかけても、手を握つても反応がなく、私たち家族もわからなかつた。そんな父の目に涙があふれこぼれた。母が私達に父の手を握らせ、

「パパわかつてるよ。聞こえているよ。」

と。私は今までより、大きな声で「パパ頑張つて。パパありがとう。」と言つた。その時、父の心臓の動きを示す機械が0と示し「本の直線になった。父は笑っているようだった。母は「パパ頑張つたね。やっとならなくなったね。」とてもつらかつた。悲しかつた。この日の事は、絶対に忘れない。

葬儀も終わり、母は「葉っぱのフレディ」という本をよこした。命についての本だった。命は永遠に生きている。生まれて死ぬまでの様子、何かに役に立ち、その生き方は色々あり、やがて終わっていく。でもその命は、ずっとつながっている。心に残る言葉や行動を残しながら。私にも父の言葉など、残つてる。

「パパ。私との約束を、覚えてる？水泳が大好きで、水泳選手の道を選んだ時、パパが私に言ったよね、いつか、イルカと一緒に泳いで、イルカと遊ぶうね。」

と言つた事。パパとは一緒に出来ないけど、パパとの約束を守るため、これからも練習頑張るから、応えんしてね。パパ。ありがとう。そして、パパの子に生まれてよかったよ。

入選 高学年の部 お母さんとドア

東京都
北区立梅木小学校 六年

池田 潮音

「ねえ、ママ。あのドアってなんのためにあるの？」

妹がソファから身をのりだし、キッチンのほうへと体をむけた。子供部屋と私と妹の寝室はとなりであり、その間になぜかドアがあるのだ。

「なんでだと思う？」

母がキッチンからソファへと歩きながら言った。

「えー……。移動しやすいうように？私は母のほうを向いて聞いかけないように答えた。」

「うん……。それでもあるけど、ちがうんだな……。」母はにこにこしながら言う。「えー……。私と妹は分からなかつた。何か理由があるのだろうか？」

「え、はじめから設計図をかく人が決めたんじゃないの？」

私はあのドアをじーっと見つめながら聞いた。「うん。ママが大工さんにたのんだんだよ」母は首を横にふりながら言った。

「ええー、じゃあ、なんで？早く教えてよ！」妹が目を見つめると、母はふふと笑い、話し始めた。

「二人もいつか一人ずつ部屋を持つてしょ？そのとき、二人は子供部屋と自分たちの寝室を使うの。一人部屋を持つてころには、二人とももう、おとしごろでしょ？親に言えないことが出てくると思うよ。そのとき、姉妹で相談してほし

いんだ。もし朱梨（私の妹です）がお姉ちゃんの部屋に行くときに、リビングに行くドアを開けて、親が見ている中、お姉ちゃんの部屋に行くって気まずいでしょ。そんなときに、あのドアを使つてほしいの。あのドアなら、リビングに出なくても、すぐに相手の部屋に行けるじゃない？」

「へー……。」私と妹は声をそろえて言った。そしてすっかり母に感心してしまった。

「ママって頭いいね！」私はうんうんとうなずきながらつぶやいた。「ハハハ、べつに頭がいいわけじゃないよ！」母は笑いながら言う。

もし、私が高校生になったら、友達のことや恋の相談、なやみごとなどを妹に話すだろう。そんなときに、あのドアが役にたつだろう。

妹の部屋に行くときに、あのドアにふれたら母の言っていたことを思い出すと思う。このドアがあつてよかった、お母さんはやはり私たちのことを考えてくれているんだといううれしい気持ちになる。

私と妹のことを考えてくれた、母の思いがまつたあのドアを、私はこれからも大切にしていきたい。お母さん、これからもよろしくね！

お姉ちゃんからのプレゼント

富山県
富山大学人間発達科学部附属小学校六年 塚本 祥子

青い空、白い雲。
今日は家族三人でお墓参り。

「ゆうこ、今日は暑いね。」
の母の二言をスタートに、三人で楽しくおしゃべりをしながら墓石を磨く。次は花活けだ。いつも、ゆうこお姉ちゃんが好きだったきれいな花をたくさん持ってきて、母が心をこめて活ける。最後は父が線香をあげて、三人は静かに手を合せて目を閉じる。いつもの光景だ。

父と母は姉に何を語りかけているのだろう。今までの私は、お墓の前で、学校であった楽しかったこと、嬉しかったこと、さみしかったこと、悲しかったことなどを姉に語りかけていた。でも、今回は違う。

「お医者さんになる。患者さんやその家族と心を通わせて力を合わせ、温かい心で向き合うことができるお医者さんになる。」という夢を姉に報告するのだ。

姉は生まれつき障害を持ち、体も弱かったので、よく病氣にかかり入院を繰り返したが元気な時は、いつも明るくて笑っていた。そして姉と私は、食事も一緒、眠るのも一緒、もちろなかった。おやつだって、二人でやっつて、二人で叱られたけれど、楽しかった。おやつだって、大きいままでは食べることができないお姉ちゃんに、私がちぎってあげると、お姉ちゃんはニコニコ、残りは私がバクリ、二のお菓子を分けて食べる。おいしかった。お姉ちゃんといると、どんな時も楽しかった。

入選 高学年の部
ぼくのおじいちゃん静岡県
静岡市立清水浜田小学校六年 遠山 智史

ぼくのじーじは今八十二才。雨の日も、風の日も、暑い日も寒い日も、いつも二人で歩いている。周りの人に笑われてしまいがちそうなくらい頼りない歩き方だけど、ぼくはそんなじーじを心から尊敬している。

じーじは、昔借金だらけで、駅前で自転車預りをはじめ、その後おばあちゃんと結婚して二人力を合わせて、駅前にビジネスホテルを建て、長い間社長としてがんばって来た。現在は会長として、毎日ホテルに通っている。

以前、心臓発作で救急車で運ばれ、生死をさまよったじーじ。二度目の入院はぼくが生まれた年だった。双子のぼく達をじーじが、だっこしてくれることが多くぼくはじーじの大きな手の中で安心してすぐにねむったそうだ。そんなことがでたのだから。じーじは朝方苦しみ始め二度目の救急車で運ばれた。顔は真っ青、体も冷たくなり、皆も泣いていたそうだ。じーじはきせきのたすかだった。ドクターもじーじは気力で生き返ったとおっしゃっていたそうだ。

それ以来、健康のため、毎日かかさず歩いているじーじ。人にはかっこ悪くみえるかもしれないが、ぼくはじーじのその精神力がとてすばらしいと思う。

小さな努力を積み重ね、コツコツ続けて行くじーじ。ぼくが漢字の宿題の途中でため息をついていたら、「二字書いたら、二字終わりに近づくよ。」

こんな日がずっと続くと思っていた……。
こんな日がずっと続いて欲しかった……。

私は六年生になった今、小さい頃から変わることのない、医者になるという夢について考えてみた。そこで気づいたのだ。この夢は、姉が私に残してくれたプレゼント。お姉ちゃんがゆうこお姉ちゃんだったからこそもつことができた夢だ。お姉ちゃん、ありがとう。

姉が病と闘う中、すてきなお医者さんに出会った。姉の病気を治そうと、最高の治療はもろろん 不安や疲れをかかえて姉の病と闘う姉たち家族にも温かい心使いをしてくださった。だから、姉を中心として家族とお医者さんの三者の間には、信頼関係が生まれ、心を一つにして力を合わせる事ができた。

この頃から私の夢ができたのだ。
夢に向かって歩く、それは大変なこともあるけれど、今まで困った時も辛かった時も、乗り越える力がわいてきた。きつと、お姉ちゃんが、私が歩く道にそと明りをともしてくれているんだね。

ゆうこお姉ちゃん、いつもありがとう。
私、お姉ちゃんにもらった夢に向かって二歩一歩しっかりと歩いて行くよ。
これからも私のことを見守っていてね。

と励ましてくれた。ぼくは漢字の宿題を、する度にこの言葉を思い出す。

じーじが三度目の救急車で運ばれたのは、ぼくの姉の誕生日を皆でお祝いした日の帰り道。じーじは大腸ガンだった。「今度こそ、じーじとお別れかも。」

ぼく達は皆で夜中祈った。ぼくはじーじは負けないと信じていた。手術は成功。嬉しくて涙が止まらなかった。病室にお見まいに行った時、大きな傷を見せてくれた。痛みをこらえ、笑顔で

「智ちゃん達がお守りに書いてくれたじーじの絵のおかげで元気になったよ。ありがとうね。」

と言ってくれたじーじ。ありがとう。じーじは自分の生き方を通して、ぼく達に苦しみを乗り越え、あきらめず前向きに強く生きていくことの素晴らしさを教えてくれた。人目を気にせず、コツコツと努力を続けていくことの大切さを示してくれた。どんな役職であってもけんきょに、誰にでも飾らず接することの大切さを教えてくれた。ぼくもそんな人になれるようがんばるよ。

優しいじーじ。いつも本当にありがとう。体が大変でもぼく達が頼むと、車でどこへでも連れて行ってくれて。ぼくが免許を取ったら、一緒にドライブに行こうね。それまで絶対に元気でいてね。約束だよ。

佳作

スーパーママ

宮城県
栗原市立瀬峰小学校一年

圓谷 桂愛

ママは三人めのあちゃんをうんだ。

しかし、「しんまいママなのよ」といつている。

「ねんせいのママになるのも

「はじめてだから」といつている。

二人めの四才のママになるのも、

「はじめてだから」といつている。

三人めの男の子のママになるのも、

「はじめてだから」といつている。

いつまでたっても、

「しんまいママじゃないか」とおもう。

しかし、ヒステリックは一人まえだ。

ママは、「こわい」けど「すき」。

ママのやさしいかおがすき、こえがすき。

ママのおみそしるつきのあさこはんがすき。

ママはいそがしそうだけど、

がんばっている。

ママは、「はやく、ねなさい」

「はやく、おきなさい」

ママは、「こわい」けど「すき」。

「しんまいママ」とママはいうけど、

わたしのスーパーママに「ありがとう」。

佳作 ほくのお父さん

大阪府
近畿大学附属小学校一年

岸田 優星

ほくのお父さんは、とても優しく、何でもできます。とくに、おりょうりが上手です。

この間の母の日には、お母さんのおでかけ中に、お父さんといっしょに、たくさんのごちそうを、作って、お母さんがびつくりするくらいおいしくできました。ほくのお父さんは、お母さんが、むりだよということでも、がんばってくださいます。前に、いちごがりに行った時に、とってもおいしいいちごがいっぱいとれて、ほくが、いちごうどんが、食べてみたいなど言ったら、お母さんは、そんなないよむりだよと言って、わらつていただけだったけど、お父さんは、じゃあ、作ってみようかと言って、いちごをつぶして、なにか白いこなど、こねこねて、いちごうどんを、作ってくれました。それは、おもちみたいでとってもおいしかったです。また食べたいです。ほくは、お父さんというと、何でも出来るような気

がします。今、夏休み中なので、行ける日は、お父さんと、夜のマラソンに行きます。はじめは、小さいグラウンドを、まわるだけで、はあ、つかれた、もうだめだと言っていたほくだけど、お父さんが、がんばれば、夏休みが終わるころには、こっちの大きいグラウンドの方を、いっしょにまわるようになれるよと、言っていてその時は、小さいグラウンドの方でも、こんなにつかれているのに、むりだよと思ったけど、今では、お父さんと、大きい方のグラウンドを、まわれるようになりました。はじめはむりだと、思っていたことも、おとうさんといっしょにがんばれば、何でもできるよになる気がしました。これからも、お父さんといっしょにいろんなことを、がんばっていつか、ほくも、お父さんみたいになりたいです。お父さん、いつもありがとうございます。

さこと子ばあば

静岡県
静岡市立松野小学校二年

山本 里菜

わたしのばあばは、はたらきものです。ばあばは、さんぎょうはいきぶつを分けるしごとをしています。わたしは、さんぎょうはいきぶつというのは、ただのごみだと思っていたけれど、こうじょうやこうじげんばから出る大きなごみのことでした。だから、あんなによごれてかえってくることもあるんだ、と思いました。雨の日もかっぱをきてしごとをやります。ほんとうにはたらきものだと思います。

わたしは、この前、ばあばのおしごとを手つだいに行きました。外でいろいろなものをほこびました。とてもあつかつたので、あせがいっぱい出てたいへんでした。わたしは、のどがかわいて水がのみたくなりました。ばあばを見たら、あせがぼとぼと出ても休まないでやっていました。だからわたしも、休むのをやめてつづけました。ばあばはしごとがはやくてさつさとやっています。わかい人たちがちよつと休んでもばあばは気にしないでやっていました。そんなばあばは、すごいと思いました。わたしは、ばあばが一人でできないしごとを手つだつてあげました。大きなタオルを二人がかりで切りました。

そのあと、ごみの中から、じしゃくで、くつづくのとくつづかないのに分けました。それは楽しかったです。やつと休み

佳作

パパへの金メダル

千葉県
野田市立宮崎小学校二年

長妻 愛美

わたしのパパは力もちです。かた手で、わたしのことをもち上げてくれます。おもいにもつも、へい気でもち上げられます。うんどう会のつなひきにパパが出ると、いつもパパのチームが勝ちます。

わたしは、パパにかた車してもらうのが大好きです。わたしが「パパ、かた車してよ」とおねがいすると、ちよつとこまったかおをしてからにこにこわらつて「いいよ」と言います。そしてわたしがかたにのると、ちよつといたそうなかおをします。

パパの左のかたには大きなきずがあります。「十センチくらいあるかな。高校生の時に、大きな手じゆつをしたんだよ。」

という話を聞いたことがあります。

そして、この前、そのきずのひみつをおしえてもらいました。わたしの家のちかくの中学校でやっているレスリング教室でパパはたまにコーチをしています。二年生になって、わたしも何どかパパといっしょにいったことがあります。

「レスリングは、かつかまけるか、どっちかなんだ。力と、わざと、じぶんの体のコントロールがたいせつなんだよ」

と、おしえてもらいました。パパは、中学生のときからレスリングをやっていて、ちばけんで何かいもゆうしようして全国大会に出ていました。で

時間になつてすずしいところで休みました。ばあばも、「つかれたー」。

と言つて、わたしといっしょにおやつをおいしそうに食べました。ばあばもつかれてたんだなーとわかりました。

ばあばは、たいへんなおしごとをして、もらったお金で、わたしたちにいろいろなことをしてくれれます。おいしいごはんをこちそうしてくれたり、楽しいところにつれて行つてくれたりします。いつもお世話になっているのは、わたしたちなのに、「いつもみんなにお世話になっているから。」

と言つて、かぞくをりょこうにつれて行つてくれます。いつもしてもらつてるから、わたしがばあばに、ありがとうを言いたいです。

はたらきものばあばだけと足がわるいので、わたしは、ちよつとしんばいです。できるだけばあばに立ったりすわたりしなくてもいいようにしてあげたいです。

わたしは、がんばりやさんで、やさしいばあばが大好きです。わたしも、いろいろなことを一生けんめいがんばつて、ばあばのようなおとなになりたいです。ばあばにやさしくしてあげたいです。ばあば、いつもありがとう。

も、高校生の時、しあいでかたをこわして、ほねがぼろぼろになつてしまったそうです。でも、どうしても日本一になりたくて、先生やコーチからとめられたけど、むりして全国大会に出たそうです。パパは、かたがいたかつたのでゆうしようできませんでした。きんメダルだったそうです。そして、そのあと、大きな手じゆつをして、レスリングをやめることになつてしまいました。

わたしは、この話を聞いて「パパはすごいな」と思いました。そして、どんなことでもさいごまであきらめずにがんばることが大せつだと思いました。

わたしが、うんどう会の五十メートルそうで、はしる時、とても大きな声でパパはおうえんしてくれれます。

「あいま、さいごまで気をぬくなよー。ゴールまで、つっぱしれー。」

と、大きな声すぎて、わたしは、はすかしくかんじていました。

大きな声のパパ。おこるとこわいパパ。力もちのパパ。しごともうんどうも、いつもいっしょうけんめいのパパ。おさけをのんでよっぱらうとすぐねちゃうパパ。いろいろなことをおしえてくれるパパ。

パパは日本一のパパだよ。ピカピカの金色のおりがみで、「ありがとう」の金メダルをつくつて、プレゼントしました。

おばあちゃんツアー

富山県
黒部市立三日市小学校 二年

長谷川 翔一

ほくには、二人のひいおばあちゃんがいる。もうすぐ百さいのてるおばあちゃんと、八十八さいのさき子おばあちゃんだ。二人ともろう人ホームにすんでいる。毎月ほくたちは、おばあちゃんに会うために、二つのホームへいく。それがおばあちゃんツアー。

さいしょによるのは、てるさんホーム。てるおばあちゃんは、おかあさんのおばあちゃん、二年前までちかくにすんでいた。おかあさんは、はじめてうんだほくのそだてかたがわからなくて、おばあちゃんにいろいろたすけてもらった。赤ちゃんをそだてる大ベテランだから、とつてもたよりになるんだよ。おばあちゃんにおまつちやをたててもらったり、パンケーキをつくってもらったり。いっしょにこいのぼりをながめたりしたことも、しつかりおほえている。楽しい思い出がいっぱいあるから、ホームであつても「あら、しょういつつあん、きてくれたの。」とよろこんでくれる。年をとつて耳がきこえにくいから、紙に書いてあげると、おばあちゃんはそのよろこんで、おしやべりがとまらなくなる。ほくも「あいにきてよかつたなあ。」と思う。

次によるのは、さき子さんホーム。さき子おばあちゃんは、おとうさんのおばあちゃん、はたけしごとやきゆうにゆう

はいたつを、足がいたくなるまでがんばった。それで、とうとう車いすになつてしまつて、ほくが生まれる四か月前ホームへ行つた。ほくはおばあちゃんにくらしたことがないから、おばあちゃんのことをよくしらない。おばあちゃんも、いろいろわすれるようになって、ほくたちを見てもかぞくだとわからない。それでもほくたちは会いに行く。なにもわからなくても、につこりしてもらえなくても、今までありがとうというきもちで会いに行く。長いあいだはたらいでくれて、ホームで元気でいてくれてありがとうつて。おばあちゃんにつうじなくても、かんしゃの気もちをわすれちゃいけないと思う。

今日は、おもちゃのピアノをもつていつて、うたをきかせてあげよう。おばあちゃんは、子どもとうたが大すきだから。本とうはうちに来て、ほくのグランドピアノを見せてあげたいんだけど。ほくが大きくなたら、二人のおばあちゃんをしようたいしてえんそうしてあげるよ。てるおばあちゃんには「エリーゼのために」、さき子おばあちゃんにはどうようを。それが、ほくの「ありがとうのプレゼント」だよ。まつてね、おばあちゃん。

佳作

「ママへ伝えたいこと」

広島県
広島市立五月が丘小学校 三年

岡内 健太郎

ほくは、いつも思っています。「ママ、いつもほくのことを一番に考えてくれて、ありがとう。」つて。ママは、やさしくてとてもきびしいです。でも、ほくはそんなママが大好きで、番大切です。

ほくのママは、小さくて、いつもいっしょくめんめいで、おもしろくて、温かくて、いにおいのママです。いつもはやさしいけど、もちろんおこる事だつてあります。ほくをおこる時は、とてもきびしくて全力でおこります。そういう時のママは、こわくて泣いてしまいます。ほくがどんな時におこられるかというと、やるべきことをしていないかたり、もの言いやたいで人にいやな思いをさせたり、人をまたせたりした時です。人としてとても大切なことだと言つて何でも教えてくれます。おこり終ると、かならず落ちつくまでだきしめていてくれます。

そんなママがよく口ぐせのように言うのは、「けんかりようせいはい」と「いんがおうほう」です。「けんかりようせいはい」は、ほくが友だちとケンカして帰るといつも言います。「いんがおうほう」は、ほくが人からいやなことを言われたり、されたりした時に、「いんがおうほうじゃけん、やつた人には他からかならずいやなことが返つてくるよ。だから、けんはやり返したら同じことをすることになるんよ。」と言つて、ほくを元気づけてくれます。また、よいことをした時には、「その人から直せつてはなくても、きつと、他からかならずいいこ

とが返つてくるよ。」と言つて、人のために何かをする大切さを教えてくれます。

勉強のことでも、いつもいろいろ考えてくれていきます。ほくが「何で？」と聞くと、かならず、「自分で調べてみんさい。」といつて、いっしょに調べてくれます。自分で調べたら楽しいです。自分で調べることを、考えることの大切さも教えてくれます。

ママは、ほくを一人で育ててくれてるのでいそがしいです。でも、たくさんのことを、ちゃんと教えてくれて、いつもうれししいです。そんなママだけど、実はおもしろいです。ほくが「今何時？」と聞くと、「いほち」とか「U字工事」と言います。ほくがママをわらわせようとしても、「オチのない話は、やめるー」と言つたり、いっしょに歌つたりおどつたり、いつもほくを楽しませてくれて、いつもいっしょにいてくれます。

でも、いつも元気なママが六月に急に入院したことがありました。十日間だつたけど、とても不安になりました。ママは、そうわかくはないので、早く大人になってママのことを助けたいです。ママとしょうらいの話をするとよく「早くけんのおよめさんに会いたいなあ。」と言います。ほくは、ママがおよめさんになりたい理想の人です。

おじいちゃんからの手紙

神奈川県
函館白百合学園小学校三年

内田 有咲

ふうとうをあけると、その中には手紙と図書カードが入っていました。私が本、大好きなの、知ってくれてくれたんだ。ふうとうの中の手紙には、こう書いてありました。

「この度は硬筆のコンクール、入賞おめでとう。そしてジジのための書いてくれてありがとう。おいわいに図書カードをおくります。有咲ファンのジジより。」

とても嬉しかったです。お手紙を書いてくれたんだ、私のために。病気なのに書いてくれたんだ。そう思うときゅうにどこからか、あついものがこみあげてくるような、ふしぎな気持ちがありました。

私の大好きなおじいちゃん。

私と同じようにお習字が大好きでつくえのまわりに筆をいっぱいおいて、少し前まではよく字を書いていました。でも今は重いびょう気とたたかっついて、筆を持つとつかれるので、このころは書くところを全く見ません。筆もさがったままです。

それでも私が書いた字を見せにいくと、

「上手に書けたね。」

「先生のお手本とくらべてごらん。」

にこにしながら、やさしく教えてくれます。

なので、今度のコンクールの時、

「おじいちゃんにいっぱいよるこんでもらおう。」

そう思っ私は、一生けん命れん習しました。

「賞しようをもらってくるからね。」

やくそくしたのでがんばりました。学校が遠いので一日三十分ずつしかできないかったけれど、一まいまい、心をこめて書きました。本番の作品を書いた時は、力を出しきったので、あせびつしよになりました。

だから、入賞のお知らせが来た時は、心がおどるほどうれしかったです。そのお知らせをおじいちゃんに見せると、いつも大きな目もつとまんまるになりました。一生けん命書いてくれてありがとう、そう思っおじいちゃん手紙をくれたのです。

でもねおじいちゃん、私もおじいちゃんからもらった、たくさんさんのプレゼント、思い出があるんだよ。小さい時、すみをするところを見せてくれたね。あのすみのおいは、まだわすれてないよ。私の体の三倍くらいある大きな大きな紙に書いた作品を見せてくれたね。

お習字を二人とも習っているから、習っていないみんながわからないことでも、そうだねとわかってくれるから、とっても嬉しいよ。

今はおじいちゃん書いていないけれど、びょう気がよくなってきたら、いつしよにお正月書きぞめをしようね。その時までにいもつと上手になるからね。

「おじいちゃん、私のおじいちゃんになってくれて、ありがとう。」

佳作

いろんなことを教えてくれた、大好きな弟

広島県
広島市立安北小学校三年

斎藤 野々花

わたしの弟は、しょうがいがありました。

だから、1年生にいじめられてばかりでした。でも、弟はいじめられてもニコニコわらっていました。それはやさしいからです。わたしと、けんかをしても、3時には、自分のおかしとわたしのおかしをもつてきてくれたり夜には、わたしがくらいのところかてなのをわらして、ついでにきてくれたりして家族でいばんやさしい弟でした。でもとつてもとつてもやさしかった弟が池におちて、死んでしまいました。そのときわたしは、のどをしゅじゅつしてにゅういんしていました。ついていてくれたおばあちゃんがかんごしさんに、

「おうちからおでんわです。」

と言われ、よばれてかえってきたときかえってきたので、びっくりしました。わたしが、

「どうしたんだとしたん？」

と、なんかいもきいたらおばあちゃんが、

「ごめんけど、下で、おばちゃんがむかえにきてくれるから、かえつてから話すよ。」

と言われたので、きになるけど、

「う、うん。」

と答えました。なんだろうどうしたんだろうと、思いながらも、1人じゃさみしいから、かんごしさんと、あそんでいました。しばらくして、ドアのすきまからそとをみると、お父さん

がいたので、

「お父さん。」

と言ったら、父さんもないので、もう1ど、おばあちゃんに言ったように、

「どうしたん？」

と聞いてみました。すると、ちかくにあった、イスにすわつて話してくれました。

「じつは、けんどが（弟）池におぼれて、しんだんじや。」

と聞いて、なきました。けんどのいる、そうぎやさんに行つて、つめたくなつたけんどのほつたをさわりながら、思いました。どうしてなんだろうしてなん。これ、ゆめだよ。うそだよ。ねえーと思いが、なきました。そしておそうしきと、おつやのことで、びっくりしました。それは、おそうしきと、おつやの日に来たからです。たったの8年間しか生きられなかったのに、こんなに人をしていた弟は、すごいと思います。

どうしてそんなに、しっていたのか、わたしは、とうてもやさしかったからだと思います。わたしは、今こう思います。もしも、ゆめの中で、いいから、あえたら、

「ありがとう。大好きだよ！」

と言つてあげて、ぎゅーと、だきしめて、あげたいです。

佳作

パパのくつ下

福島県
郡山市立高倉小学校三年

佐々木 夏奈

私のパパは、ガソリンスタンドではたらいっています。こしよした車を直したり車にガソリンを入れる仕事をしています。

朝は、私たちより早く起きて仕事にでかけます。帰りは、私たちがねるころです。土曜や日曜も毎週休みではないので、私は、パパが好きなのになかなか会えなくてさみしいです。

パパのきらいな所があります。それは、「くつ下のおい」です。大好きなパパだけど、私のパパのくつ下は、とてもくさいのです。たまに会社から早く帰ってくるとはいているくつ下をまるめて私やお姉ちゃんに投げてきます。パパは、私たちに、「くつ下くさいヨ。」

と言われるとわらって私の鼻にくさいくつ下をもっと近づけます。そしてくつ下を床におきっぱなしにしておきます。

ある日、パパの仕事がお休みの夜、パパは私に、また、くつ下を

投げてきました。私は(うっ。くさ。)と思っていたらその日のくつ下は、くさくありませんでした。私は、(あれっ?)と思いを

した。そしてよく考えてわかったことがあります。それは、パパのくつ下は、会社から帰ってきた時は、くさいくつ下だけとお休みの時は、くさくないのです。パパは会社で、私たちのために、あつい夏も、さむい冬もがんばって仕事をしているんだと思いました。私は、パパにひどいことを言ってしまったなあ。と思いました。だからパパのくつ下は、くさいけど、「くさい。」と言わないでせんとくきまで運んであげることになりました。

パパ、いつも「くつ下くさいヨ。」と言ってごめんね。いつも私たちのためにはたらいってくれてありがとう。だけどあんまりむりしないでね。そしてときどき早く帰ってきて、たたかいくつ下をいっしょにしたいな。

佳作

じゅんちゃん

群馬県
藤岡市立美九里東小学校三年

柳原 蓮

じゅんちゃんは、わたしのおばあちゃんです。いつから「じゅんちゃん」とよんでいたのか家ぞくに聞いてもわからなかったけど、小さい時からわたしはじゅんちゃんが大好きでした。

休みの日にはいっしょに庭で草むしりをしたり、わたしと妹をつれてさんぽにいったりしてくれます。

わたしとじゅんちゃんは、旅行が大すきで二人きりでバスにのつてかける時もあります。動物園に行つていろいろな動物や鳥を見たり、きれいなチューリップ畑を見たりしてとても楽しいです。でも、一番楽しいのは、帰りのバスで二日の楽しかった話を二人でわらいながらする事です。

いつも仕事をしていてつかれているのに、わたしと遊んだり話をしてくれてとてもかんしゃしています。

今までじゅんちゃんに「ありがとう」と言いたいのにはずかしくて言えなかった時がたくさんあります。

それは生まれた時の話や、うん動会でいっしょにおどつてくれた時のたくさんの「ありがとう」です。

その中で、一番「ありがとう」と言いたいののは、わたしが自転車になかなかのれなくておとうさんにおこられていたときのことです。ないてしまい、もう自転車なんてのりたくないと思つていたわたしに「じゅんちゃんがおしえてあげるよ」とやさしく言つてくれた時です。

夕方の公園で二人でれんしゅうをしていて、じょうずにのれないわたしに毎日くらくらくなるまでおしえてくれました。やつのれるようになったわたしが「風になったみたい」といつて二人で大わらいた時のことがわすれられません。今は自転車が大すきになり休みの日にのるのがとても楽しみです。

わたしがわるいことをしたらおこるけど、いつもやさしくしてくれるじゅんちゃんが大すきです。楽しい時もかなしい時もいっしょにいてくれて「ありがとう」

これからもたくさん「ありがとう」と言えるように体にきをつけて元気なじゅんちゃんであってほしいです。

佳作

おばあちゃんありがとう

長崎県
宮崎市立鯨伏小学校四年

今西 裕季子

わたしのおばあちゃんは、明るくて、とてもやさしい人です。わたしが、学校から帰ると、「お帰りが、暑かったでしょ。冷たいジュースを入れてあげるからね。」と、栄養たっぷりの手作りジュースでむかえてくれます。お父さんとお母さんは、仕事でいそがしいので、わたしやお姉ちゃんが、小さい時から、おばあちゃんは、ずっとお世話をしてくれています。

わたしは、算数が苦手です。一年生の時は、宿題をわかるまで全部教えてもらっていました。四年生になつてからは、わり算や少数など、むずかしいのがいっぱいになりました。時間もかかるけど、一回自分でやってみます。それを見て、おばあちゃんがヒントをくれます。おばあちゃんは、ずっとおこらないで、いつでも根気よく教えてくれます。夜七時から、いつしよに勉強してくれます。つかれていても、足がいたくても、七時からの約束を守ってくれます。そして

「すぐにはできる人もいれば、何回もしてできる人もいるんだよ。ゆきちゃんも、ゆきちゃんなりにがんばればいんだよ。」おばあちゃんにはげましてくるので、わたしもがんばろうという気持ちになります。

四月におばあちゃんが交通事故にあった時はびびりしました。夜、病院に行くと、おばあちゃんは、頭にほつたいをま

て、ベッドにねていました。わたしが、「おばあちゃん。」と、声をかけると、

「ゆきちゃん、ごめんね。」

と言つて、手をやさしくにぎつてくれました。わたしは、とっても心配していたので、なみだがでてきました。わたしは、本当によかったと思いました。今、おばあちゃんは、たい院して家で少しずつ元気になっています。でも、長い時間起きられなかつたり、歩きにくかつたりします。だから、わたしは、せんとく物をとつたんであけたり、荷物を持ってあげたりしています。わたしは、もつとおばあちゃんが楽になつて、早くよくなるように、たくさん色々なお手伝いをしてあげたいです。おばあちゃんも、わたしがつかれている時や、元気がない時、

「エネルギー。」

と言つて、ムギューとだっこしてくれます。わたしは、せがのびて、もうちょっとおばあちゃんにおいつきます。だっこしてもらうと、おばあちゃんは、

「ゆきちゃん、大きくなつたね。」

と、よろけながら言つてくれます。

わたしは、おばあちゃんが大好きです。これからも長生きしてもらえようように、わたしができることをして、やさしくしてあげたいです。おばあちゃん、いつもありがとう。

佳作

初めての夜の留守番

千葉県
浦安市立日の出小学校四年

住井 天音

「二人で留守番、お願いね。」

そう言い残して、母は出かけていった。昨年秋、父が仕事でいない時、母は、マンションの自治会役員の集まりに、出席しなくてはいけなくなつた。

今までだつて、短い時間なら妹と留守番したことがある。でも、二人だけで夜に家ですごすのは初めてのことだ。しかも、二つの約束をした。お風呂をすませること、夜九時にはねむること。

「円香も年中になつたんだから、お姉ちゃんとがんばるのはいい経験よ。」

母は、出かける前にのん気なことを言っていたけど、私は心配でたまらなかつた。

円香は、二月生まれで、クラスでもおチビさん。本人はいつも一生けん命なのに、友達よりもうまく出来ないことが多い、しょっちゅう、落ちこんでいるのだ。今夜も、すねないといんだけどなあ……

まず、テレビを見て、ごきげんの妹を、お風呂にさそつた。まだ二人では上手に出来ないで、円香の頭をシャンプーであらつてあげた。すると、

「気持ちいい。いつもよりさつぱりした。」

とびきりの笑顔を見せられた。私も、なんだかうれしくなつた。いい調子だ。

かみをかわかしてあげて、今度は、一しよにおふとんに入つた。いつも、母がしてあげるように、妹のとなりで横になつた。円香は、安心したように、私にくつついて、うとうと

し始めている。私も妹が温かくて、きもちよく、ねむり始めた。その時だ。とつぜん、

「ママ、トイレ行きたいよおー。」

と、たたき起こされた。私は、「お母さんと、かんちがいしたんだ。」と思うと、かわいくたまらなかつた。いつもなら、面どうくさいのに、「わかつたよ。」と自然に世話を始めていた。

次の朝、母は、

「二人で留守番ありがとう。二人だけで、よくちゃんとねむれたね。お姉ちゃん、円香ちゃん、えらかつたね。」

とほめてくれた。すると、妹がすぐに、

「お姉ちゃんが、やさしくしてくれたからだだよ。お姉ちゃん、ありがとう。」

と言つてくれた。私はその時、今まで聞いた中で、一番うれしい「ありがとう」の言葉のように思えて、むねが温かくなつた。

あの留守番の後も、私と妹は時々つもらない言いあらそいをするところがある。でも私は、初めて二人きりの夜をすこして、これからはけんかをして、何があつても妹を守つていける、そんな自信がついたように思えた。私も、少しは、いいお姉さんになれたかな。

だから円香へ、私も言いたい。

「こちらこそありがとう。これからもお姉ちゃんと仲よくしてね。」

言葉をこえたやさしさ

神奈川県
横浜市立中川小学校 五年

劉 弘毅

ぼくの両親は、中国人だ。おじいちゃんも、おばあちゃんも、中国人だ。にもかかわらず、ぼくは、中国語がうまく話せない。だから、月に何回か、おじいちゃんおばあちゃんと電話するときは、本当に苦労する。

特に、母方のおばあちゃん、老老(ラオオオ)と話すときは、うまく話せない。しゃべっていることが少しも分らなくて、いやになってしまうこともある。

けれど、ぼくが、今、一番感謝の気持ちをも、伝えたい人は、このおばあちゃんだ。

ぼくは、なんでもすぐに人とくらべたがる。それで、自分の方が少しでも上手じゃないと落ちこむ。

その日は、いつもよりも、ひどく落ちこんでいた。習い事のえんげきで、相手役だった子は、台本をかんべきに覚えていた。なのに、ぼくは、何回も言葉につまった。それで、落ちこんでいたのだ。

その日、ちようど、おばあちゃんと電話をした。ゆううつで、そんな気分じゃなかったけれど、お母さんに呼ばれて、しぶしぶ受話器をとった。

おばあちゃん、いつでも元気だ。
「もしもし。あつ、弘毅！」

この日も、おばあちゃんの元気な声が、受話器の向こうからひびいてきた。なんだか、なやんでいることを、忘れてしまっ

な声だった。

その後、少し話をしてから、おばあちゃんは、こう言ってくれた。そのことが大好きだよ。弘毅は、そのまま十分だよ。」

落ちこんでいたぼくには、すごくはげみになる言葉だった。もちろん、中国語だ。そんなによく分かるわけじゃない。お

ばあちゃんの顔も見えない。ぼくが落ちこんでいるのを知って、気がつくってくれたわけでもない。

でも、一つだけ、ぼくに伝わってきたことがある。それは、おばあちゃんの、言葉をこえたやさしさだ。

言葉は通じないけれど、おばあちゃんの声を聞くだけで、なんだか心が軽くなっていく。すごく不思議だった。だけど、すごくうれしかった。

今でも、おばあちゃんほくに元気をくれる。だから、早く中国語を覚えたい。早く、おばあちゃんと話せるようになつて、おばあちゃんのことをもっと分かりたい。

だから、いつまでも、元気でやさしいおばあちゃんのままいてほしい。ぼくは、いつまでも、おばあちゃんのことを、大好きだから。

佳作

二人のお母さんありがとう

千葉県
多古町立久賀小学校 五年

天井 玖瑠海

私は幼稚園のころ、友達に良く「くうちんのママは、どっちが本当のママなの？」

つて聞かれていつも答えてに困っていました。小学生になって、友達には、パパもママも一人ずつしかいない事

気がつき、私にも、本当のパパとママは一人ずつで、もう一人ずつのパパとママは、となりに住んでいるというこのパパとママで、私のおじ

さんとおばさんだと理解することができました。いとこ達は、ずっと私のお兄ちゃん、お姉ちゃんだと思う位、

同じように育ててくれました。本当の両親が仕事でいない時でも、もう一人のパパやママがいっ

しょにいてくれたのでさびしくなかったし、安心でした。今は、ママはお母さんで、おばさんは智恵美ちゃんと呼ぶよう

になり、二人のちがいがわかるようになったけど、心の中では今でもママが二人いるのだと思っています。私が病気の時は、お母さんも智恵美ちゃんも同じに心配し

てくれるし、がんばった時は二人共ほめてくれるけど、おこられる時だけは、ママは二人だけでいいのになって思います。本当のお母さんの事は大好きだけど、智恵美ちゃんはとても

大切なママです。智恵美ちゃんは、いつも私に肩もみや足のマッサージをしてほ

しいつて言うので、やつてあげると、本当のお母さんが、「智恵美ちゃんのお願いはなんでも聞いてあげるのに、ママには

してくれない。」

つて言うから、「智恵美ちゃんにはお世話になっているから。」と答えると、

「ママだつてお世話してるのに。」

つて言われます。だから「お母さんは、自分の子供のお世話するのはあたりまえで

しょ。」つて言うけれど、本当は、智恵美ちゃんは、お母さんの何倍も

太っているから、肩も足もすこくつかれるだろうし、やつてあげると百円くれるし、私と性格がにているみたいで話していても

とても楽しいので、なんでもお手伝いしたくなるのです。私には、たくさんのお母さん

がいてくれるので、とても幸せです。うれしい事ががんばった事も、友達に二倍感じる事ができるぶんだけ、おこられる事が半分になったらもうと良いけれど、何でも二倍感じて、ずっと二人のお母さんとお父さんを大切にしたい

と思います。顔を見るときは、さかしくいから言えないけれど大切な一人のお母さんには、いつも心の中で、「ありがとう。二人共長生きしてね」

最高の弟へ

千葉県
木更津市立清見台小学校 五年

澤村 駿

弟は小学三年生。笑いを作り出す名人だ。いつも替え歌やタジャレを考え出しては、大声でつぶやいている。そのタイミングも言い方も絶妙で、ぼくたち家族はいつも笑わされる。でも、そのためにハプニングや失敗も多く、母に、「面白い事をやって笑いをとらなくてもいいから、もつと真面目にやりなさい!」と、よく言われている。

ぼくの学校では、一・六年、二・四年、三・五年が、ベア学年として遠足や芋掘りなどで一緒に行動することになっていく。ほとんどの場合、弟と二年間ベア学年になるのだが、正直いうと気が重かった。家で弟の様子から考えると、何かハプニングが起きて、同級生からかわれそうだったからだ。

しかし、実際ベア学年として過ごしてみると、心配していたようなことは全く起こっていない。それどころか「○○(ぼくのベアの子)がサツカーを始めたから、わくわくタム(ベア同士と一緒に遊ぶ時間)にはサツカーをやったらなど」と、ぼくがベアの子を楽しませてあげられるようにいろいろ情報を集めてアドバイスしてくれたりもする。

また、ぼくの同級生に

「お兄ちゃん、家ではどんなことをしているの。」などと聞かれたときも、ぼくが困るような事は言わなかった。そうだ。高学年にもなると、友達に話したくないことだ。ある。そんなぼくの立場をわかっている弟ですごいな。と、ちょっと感動した。

思い返してみると、弟はいつもぼくをしたい、気をつかってくれている。

たとえば、マンガやテレビで面白い場面があった時、「ねえねえ、ここ面白くない?」

と同意を求めると、必ず、

「アハハ! そうだね。」と、笑ってくれる。

ぼくの具合が悪い時は、テレビを見やすい方に向けてくれたり、飲み物を運んでくれたり、氷まくらをかえたりしてくれる。

先日、ぼくが学校の宿泊学習で「晩留守にした時は、予定表を見ながら、

「いに(お兄ちゃん)今なにしているかなあ。」と何度も何度も言っていたらしい。

最近、母が、ぼくの同級生を何人か挙げて、だれが兄なら良いかと、弟に質問したら、弟はぼくが兄であるのが一番、と答えたそうだ。

ぼくだったら、だれが弟ならいいだろう? 何人か思い浮かべてみたけど、やっぱり今の弟以外は考えられない。

恥ずかしくてはつきりと言ったことはないけれど、口にできないと気持ち伝わらないから、今日は思い切つて言うよ。

「キミは最高の弟だよ! これまでいつもありがとう。これからもずっとずっと仲良くしようね。よろしく!」

佳作

家族の絆

山形県
鶴岡市立朝陽第六小学校 五年

村山 耀子

「ばあちゃん、絆だより持ってきたよ。」

私がそう言うと、ばあちゃんはいつもメガネをかけてすぐ絆だよりを読んでくれます。そして、

「ありがとう。」

と、うれしそうに言ってくれます。私は、小学校四年生から家族内でおきた出来事を、毎月「絆だより」という新聞にまとめ、発行しています。そして、完成するとまっ先に山形にいるばあちゃんの所に送ったり、とどけたりします。これを書き始めたきっかけは、新聞を書くのが好きだったからです。今まで一年半も書き続けられたのは、もう一つの理由があります。それは、家族のみんなが絆だよりの感想を伝えてくれたからです。特に、ばあちゃんは、感想だけでなく、アドバイスも書いてくれました。例えば

「発行日も書いた方が、あとから読み返す時にいつ書いたのか分かっていいよ。」

や、

「題名の部分をコピーして、毎回同じにした方がカッコイイんじゃない。」

と、いろんなことを教えてくれました。そのアドバイスされたことを頭に入れながら、次の号を書いていきました。するとどんどんカッコイイ新聞になりました。その絆だより

を読み返しながら、

「今月は、どんな感想をもらえるかなあ。」

と、ワクワクしながらとどけていました。「こうして、一年半も絆だよりを続けています。家族からも、

「読みやすくていいね。」

や、

「クイズが入っていておもしろいね。」

などと言ってもらい、とてもうれしくなりました。その山形のばあちゃんは、今年の六月に亡くなってしまいました。病気が進んで、五月号の絆だよりは、自分で読むことができず、じいちゃんが読んでくれたそうです。でも、うれしそうに顔で私の書いた絆だよりを見てくれた、と聞きました。もう、ばあちゃんから感想やアドバイスをもらうことは出来ませんが、ばあちゃんから教えてもらったことを忘れずにこれからも絆だよりを書き続けていきたいです。本当は、ばあちゃんにもう一度会って、

「ありがとう。」

を言いたのですが、それは出来ないのです。絆だよりにありがとうの思いをこめて、これからも書いていこうと思います。

「ばあちゃん、ありがとう。」

佳作 姉の日

埼玉県
さいたま市立島小学校 六年

萱場 ほのか

私には十六才、年のはなれた姉がいます。姉はいつも明るくて、やさしくて大好きです。マンガやイラストのかき方を教えてくれたりピアノを教えてくれたり、私が必要な時は、話をきいてアドバイスをしてくれたり、私が必要なそばにいて、私はずっともうれしい気持ちになります。姉は焼肉屋さんで働いていて、東京で一人暮らしをしています。私は一人で暮らすのはさびしいのではないかと思いましたが、姉は一日のほとんど、仕事場のみんなといっしょなので、きつとさびしくなんかなく、楽しい毎日なんだろうと思います。

姉は、月に二、三回家に帰って来ますが、その時、よくお肉を持って来ます。私の知らないような名前の肉がたくさんありますが、もとをたどれば「ぶた」と「牛」。「その肉はぶたの胃だよ。」などと、細かく教えてくれるので、自分の食べているものがそうだと知ると、おもしろく感じました。

私は、そんな姉のために、「姉の日」を作ろうと思いましたが、「姉の日」は、母の日や父の日のように、その人への思いがとうを伝える日です。私は姉を喜ばせたくて「姉の日」をいつにしようかと考えました。はじめは、五月は母の日、六月は父の日、七月は姉の日と思ったのですが、休みの都合もあって、八月二日を「姉の日」と決めました。そ

してこの日に姉に感謝の気持ちを伝えることにしました。

七月の初めごろ、私は姉に「姉の日」のことを話しました。するととても喜んでくれました。プレゼントとしてはいいものを聞くと、「ぶたと牛のぬいぐるみがいいな。」と言いました。私は裁縫が好きなので、持っていた材料ですぐに「牛」をつくり上げました。なんだかとてもワクワクしてきました。七月の後半になって、さらに材料を買って、「ぶた」もつくり上げました。ぶたには少し細工をしました。ぶたの後ろ側に「売り上げUP↑」と赤い糸でぬいつけました。お守りです。

「姉の日」当日、部屋にかざりつけをして姉が帰ってくるのを待ちました。そして、牛とぶたのぬいぐるみが入った箱にラッピングもして姉にわたしました。その時、姉の顔がパアッとかがやいたように見えました。

「うわあ！かわいいな。レジにかざろう。みんなに自まんしよう。」

喜んだ姉の笑顔が私は大好きです。姉の笑顔を見るたびに私まで笑顔になるようです。

私は「姉の日」だけでなく、いつも姉に感謝しようと思っていました。姉がいること、姉のすべてに「ありがとう」。

佳作 私のお母さん

栃木県
那須塩原市立埼玉小学校 六年

武藤 菜穂

私のお母さんは、助産師をしています。自宅で助産所を経営しています。そのため私、お母さんの仕事を手伝うことがあります。出産しているところは、見たことはありませんが、患者さんの退院するところを見ると、とても幸せな顔をしています。お母さんは、そんな患者さんにも、私の家族にも笑顔を与えてくれます。

私の将来の夢は、お母さんと同じ助産師になることです。私は幼いころからお母さんは

「菜穂は、助産師が一番合っているよ。」と、話していました。その言葉もあって、私は小さいころからこの夢に決めていました。

幼い時は、お母さんのこの言葉だけで夢に向かっていきましたが、今はちがいます。今の私の思いは、赤ちゃんとそのお母さんを救って、幸せになつてほしいということです。命を守りたい。これが私が強く思っていることです。

お母さんは、助産師になろうと思った時は、どういう思いがあったのでしょうか。不安などなかったのでしょうか。

私には、たくさんの不安があります。助産師になつても、もし赤ちゃんやお母さんに何かあったらどうすればいいのか。本当に私は、命を守ることができるのか。考えれば考えるほど不安になります。

でも、お母さんは、私に勇気を与えてくれます。お母さんは気付いてないと思いますが、仕事をしている時のお母さんの姿は、私に勇気を与えてくれる姿なのです。

お母さんの仕事は、あかちゃんの命を預かることと言えます。私は、お母さんと一緒に往診に行つて手伝うことがあります。仕事中に赤ちゃんを抱くと、命の重たさを実感することが出来ます。お母さんは、私にたくさんの経験を与えてくれるのです。

お母さんは私にたくさんのことを与えてくれます。笑顔、夢、勇気、経験、そして幸せなど、私にも患者さん、その家族にも与えてくれるのです。

私は、そんなお母さんに「すてきな夢をもたせてくれてありがとう。」と心から伝えたことはありません。ちよつとしたことなら簡単に「ありがとう」を言うことができますが、夢を与えてくれたことに対して、心から「ありがとう」を伝えることは今の私には、まだ早いと思います。夢に向かって、たくさんの努力をしなければならぬと思うのです。

私もお母さんのように、たくさんの人に笑顔を与えられる人になりたいです。そして、笑顔を与えられる人になった時お母さんに心の底から「ありがとう」を自然に言えることでしよう。

お父さんのせなか

愛知県
岡崎市立緑丘小学校五年

倉田 七生

「ななちゃんマッサージしてくれる？」父のいつもの口ぐせだ。私は手がつかれるし、やりたい事があるのにめんどくさいなあと、思う。でもたまにやってみると目をつぶって、「あゝ気持ちいい」と温泉にでもつかついているかのように言う。父のせなかは大きい。私が乗ってもびくともしない。

どちらかと言うと、私は父親似だ。顔も似ているけど、性格もまた似ている。父の話はおもしろい。父と私はお笑いのぜつみようコンビだ。夕食の時、その日にあった事など、いろんな話題でもり上がる。大した話ではないけれど、父が話すとおもしろい。父の帰りがおそいと、「なんか静かだね、お父さんがいないともり上がらないね」と兄が言う。私もそう思う。

父はキャンプがしゅみだ。計画からじゅんびまでひとりで行っている。パンフレットやいろんな情報を集めて私たちにどこへ行きたいのか聞いて決める。兄が中学に上がるまでは夏は毎月一回ぐらい行っていた。私が小さい時から行っているが、どれも楽しい思い出ばかりだ。夏はキャンプ、冬はスキー、二年を通していろんな経験をさせてもらっているありがたいなあと思う。

また以前、こんな話を聞いた。私はまだ2〜3才のころ

佳作

僕のおじいちゃん

茨城県
龍ヶ崎市立八原小学校六年

加藤 大地

僕のおじいちゃんは、二年前の夏に猛暑を記録した、岐阜県多治見市(たじみし)の隣、愛知県春日井市(かすがし)に住んでいます。そして、僕の家初めて来てくれた時、大きいおばあちゃんが畑で育て、朝摘みたてのたくさんの苺を、わざわざ新幹線に乗って届けてくれたのです。そのおいしさにビックリした僕は、それ以来、「苺じいちゃん」と呼ぶようになったのです。

そんな中、妹は最近までおじいちゃんの名字を「苺」だと思っていたらしく、それを聞いた時、すごくおかしく思いました。

苺じいちゃんは、毎年、僕の誕生日には必ず、僕の大好物を送ってくれます。そして、必ず電話で「お誕生日おめでとう」と言ってくれます。それに、両親には内緒ですが、欲しいものがあつた時に相談すると、いつも両親と交渉してくれます。両親にとつて、苺じいちゃんはとても恐い存在のようで、苺じいちゃんは僕にとつてはとても強い味方です。

しかし、お母さんは「昔のじいちゃんは、とても恐くて敵しかった。」と言っています。一番の思い出は、中三の三者進路面談の時に、スーツにパンチパーマとサングラス姿だったから、クラスの友達から「ヤクザが来た!」と叫ばれたそうです。当時マジメだったお母さんは、誤解されて、とても困ったそうです。僕はその話を聞いた時、今とは全く違うので、想像できませんでした。

そんな苺じいちゃんですが、僕ととても関係している

に家族でプールに行った時の話だ。子どもすべり台から、すべる私を父は近くで見えていたそうだ。すべり台からプールに飛びこんだ私は水の中からすぐに出てこなかった。父が見守っていると、ゆっくりとうかんできた。びっくりした父は、あわてて走っていつて私をすくい上げた。その時父は、心ぞうが止まりそうなくらいあせって、こうかいしたらしい。父がそばにいてくれなかったら、私はいったいどうなっていたのだらう。そんなたよれる父は朝から晩まで二日も休まず働いている。休みの日も家族のために、いろいろ動いてくれて、自分の時間もあまりないと思う。父はビールが大好きだ。私がビールをそそいであげると、「この時のために一日がんばってきたんだ」と言い、父は日のつかれをビールでいやす。父ががんばって仕事をしているから、今まで不自由なく、くらししてこれたんだと思う。

体を大事にしているまでも、長生きしてほしい。そして私が大きくなってもいっしょにキャンプに行けたらいいなあと思う。

ところがありません。それは、家族関係の中で、苺じいちゃんに僕だけが同じ血液型・O型なのです。そして、苺じいちゃんと好みが似ていて、炊きたてのご飯・お味噌汁・卵焼き・漬物があれば幸せなのです。

先日、僕の誕生日プレゼントのお礼に、地元のおいしい新鮮な卵をたくさん送ってあげたら、とても喜んでくれました。

また、お刺身やお寿司が大好きな僕のために、一年と三年の時に、わざわざ苺じいちゃんの故郷・島根県出雲市(いずもし)に招待してくれました。そして、苺じいちゃんが船に乗って、海で探ってきた新鮮な魚を、苺ばあちゃんが料理して、ごちそうしてくれました。

家のすぐ裏には海があるので、朝夕の二回歩いて海水浴に行きました。また、朝から新鮮なお刺身とあら汁が食べられたので、本当にぜいたくだと思いました。

そんな苺じいちゃんは、昔、野球をやっていたようで、僕が運動も得意なもの、苺じいちゃんに似たのかもしれない。僕が大きなケガをした時も、いつも苺じいちゃんが励まして、アドバイスしてくれました。今、僕が楽しく勉強や運動が出るのも、苺じいちゃんのおかげだと思っています。苺じいちゃん、いつまでも長生きしてください。僕は、これからも、勉強や運動を頑張りますので、いつまでも応援して下さい。

選者あとがき

あさのあつこ「作家」

たくさんの力作を寄せてくれた、子どもたちの底力に感心しています。大人が書く
とわざとらしいフレーズも、子どもが書くところでは感じません。大人たちの姿を通
して豊かな心を養っているからだだと思います。いつもこのコンクールの作文を読むと、
子育てしていた時を思い出します。

尼子 騷兵衛「漫画家」

このコンクールは、子どもたちの感性を養うのにとでも良いと思います。今回は、おじい
ちゃんやおばあちゃんのことを書いた作品が多いようです。それぞれの作品に登場
するお年寄りは、背中で人生を語っています。子どもたちは、お年寄りと深く関わ
ることによって、考察力を深めることができたのではないのでしょうか。そんな大人が
周囲にいる環境で育つのは、素晴らしいことだと思います。

森田 正光「気象予報士」

今回も作品の質の高さに私だけでなく、スタッフも「ウーン」とうならされてしま
いました。作文をかくことが好きじゃないと、普段の生活の中で感じていることを
上手に文章にするのは、むずかしいのではないのでしょうか。こんなにも素敵な作文が
たくさん集まったことに感謝します。どうもありがとうございます。

鈴木 弘行「シナネン株式会社代表取締役社長」

回を重ねるごとに、全体のレベルが上がってきており、読み応えのある作品ばか
りでした。私もおじいちゃんと言われる歳になって、おじいさん、おばあさんとの
交流をテーマにしている作品には、家庭の中での存在感に、私が勇気をもらいま
した。今回で3回目を迎え、団体で応募していただく学校も増え、「いつもあり
がとう」の輪が広がって嬉しいです。作品を通してエネルギーをもらいました。
ありがとうございます。

下高原 拓「朝日小学生新聞」

どの作品もレベルが高く、選ぶのに苦労しました。3回目を迎え、新しい切り口の
作品が見うけられ、みなさんこのコンクールについて研究しているように感じました。
読んでいてうらやましくなるくらい、家族の幸福感、充実感が伝わってきました。
作品づくりに取り組むことで、家族の絆も深まったのではないのでしょうか。

(順不同敬称略)